休眠預金活用事業・2021年度通常枠
「学生が希望を持てるまちのキャリアセンター」事業

事後評価

報 告 書

2024 年 4 月 30 日

一般社団法人umi

目次

1.　基本情報および事業概要　4

1.1　基本情報　4

1.2　事業概要　5

2.　事後評価実施概要　18

2.1　実施概要　18

2.2　実施体制と実施時期　18

2.3　評価項目と測定方法　18

2.4　対象事業地域の背景　20

3.　事業の実績　22

3.1　インプット　22

3.1.1　人材　22

3.1.2　経費と自己資金　22

3.2　活動とアウトプットの実績　23

3.2.1　主な活動　23

3.2.2　アウトプットの実績

29403.3　外部との連携の実績　41

4.　アウトカムの分析　42

4.1　アウトカムの達成度　42

4.2　波及効果　48

4.3　事業の効率性　51

5.　成功要因・課題　53

5.1　成功要因　53

5.2　　課題　54

6.　結論　56

6.1　事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価　56

6.2　事業実施の妥当性　56

7.　提言と教訓　57

7.1　本事業で取り扱った活動を発展させるための提言　57

7.2　事業実施から得られた知見・教訓　57

参考資料　59

事業要約

キャリア[1]に不安を抱える大学生は、大学卒業後のキャリア形成を考えたときに、大学や大手就活サイト以外での情報収集や相談場所に困り、誰に相談してよいか分からずに孤立している。そうした不安が解消されないままでいると、大学卒業後の自分自身の働き方や暮らし方の課題として直面した際に、理想の状態がわからない為に解消する術がなくなり、心身に影響が出る状況に発展することも想定できる。こうした状況は、大学期においての大学や社会の支援が、生き方（暮らし）ではなく仕事（働くこと）の支援に主軸が置かれていることが主な背景として挙げられる。そのためにも、学生期において多様なキャリア観に触れながら自身のキャリアについて見つめることができる地域での実践が有効である。
大学生のニーズと同様に、地域社会でも担い手不足から若者との関わりを期待する声が上がっているが、一方で関わる機会の少なさや関わり方の難しさに課題を感じるという声も多い。本事業の対象地域、島根県雲南市において、高校卒業と同時に大学や専門課程へ進学する学生は80%を超え、就職する学生は15％程度いる。（「令和4年度学校基本統計学校基本調査結果報告書（島根県分）」より）また、市外で学生生活を送った出身者が就職を考えた際に、雲南市へ戻りたいという声は少なく、また雲南市へ戻りたいと思っても選択肢が少ないという声が上がる状況だ。そのため、雲南市の若年の年齢層が薄い傾向にあるため、若者の担い手不足はかなり深刻な状況であることが伺える。
このような背景から本事業では、大学生が在学中から地域社会と関わる機会を提供することで、大学生は自身のキャリアへの不安を払拭し地域社会に希望を持てるように、また大学生に刺激を受けた地域住民も成長し新たな活動が生まれるように3つの点で支援を行った。

第１に、気軽に相談できる窓口を設置、またキャリア相談を気軽にできる座談会イベントの開催を通して、大学生の身の回り以外にも相談できる窓口があることを周知した。その中で、個別相談を希望する大学生に対しては面談の機会を設け、大学生自身の不安を整理し、地域社会で一歩踏み出せるようサポートを行った。その結果、年間を通して一定の相談があり、相談窓口の需要と効果的な実施方法が明らかとなった。

第２に、地域と大学生が目指す方向性を共有し活動・成長できるプログラム実施のため、その企画・運営を行った。主にインターンシップを実践プログラムとして提供し、インターンシップ受け入れ先の開拓からプログラムの振り返りまで行い、大学生と受け入れ先双方にとって学びや気づきの生まれる機会となった。

第３に大学生が地域に入り、自身のロールモデルとなるような住民と繋がることで、キャリア形成の一助となるように、地域住民と大学生の繋がりづくりを行った。

[1] 人生を通して得る経歴や経験のこと。

こうした支援から、相談後やプログラム終了後にも地域に関わる大学生が一定数確認でき、またその関わりからさらなる自身のロールモデルとなる人との出会う機会を獲得していることがわかった。

1.　基本情報および事業概要

1.1　基本情報

事後評価の対象の基本情報は下記の通りである。

表 1-1 基本情報

項目	内容
実行団体名	一般社団法人umi
実行団体事業名	学生が希望を持てるまちのキャリアセンター
資金分配団体名	公益財団法人　南砺幸せ未来基金
資金分配団体事業名	草の根活動支援事業
実施期間	2022年3月28日　～　2024年3月31日
事業対象地域	島根県雲南市

1.2　事業概要

本事業の概要については下記のそれぞれの項目の通りである。

また事前評価に基づき、事業計画の一部を事業開始時点から追加・変更した箇所があるため、変更前を「事業開始時点」、変更後を「事前評価実施後」として記載している。

主な変更箇所、およびその理由は下記の通りである。

- 当初３年事業として計画していたものを採択金額の減少に伴い、2年事業として事業規模や事業スケジュールを中心に再計画を行った。
- 本事業の再計画にあたり、実践の場である地域社会も重要なステークホルダーであると考え、アウトカムを直接対象者であるキャリアに悩みを抱える大学生だけでなく、地域社会も対象とし変更、これに対応する形でアウトプットも変更した。
- 事前評価を実施し、それぞれの初期値を算出した。初期値に基づき、目標値を修正した。
- 事業終了後の継続性などを考え営業活動や販路の確保に関するアウトプットを追加。
- 事前評価結果や関係者間のディスカッションに基づき、事業内容全体のブラッシュアップを行った。

1.2.1　事業によって解決を目指す社会課題と想定される直接対象グループおよび最終受益者

事業によって解決を目指す社会課題と想定される直接対象グループおよび最終受益者は、下表の通りである。

表 1-2 事業によって解決を目指す社会課題と想定される直接対象グループおよび最終受益者

項目	内容
事業によって解決を目指す社会課題	地域社会に出ることへ不安（社会的・職業的自立の困難や危機感）をもつ大学生は”就活”を通した大学卒業後のキャリア形成を考えたときに、大学や身の回りの人以外の相談先に困り、誰に相談して良いか分からずに孤立している。また自力で地域へ一歩踏み出しても地域に大学生を育てるという概念が浸透しておらず大学生の教育の場として開かれた機会がないため、地域に希望を持てない大学生がいることを社会課題と設定する。 一方で、地域社会において重要な課題の1つである「若者の担い手確保」について、雲南市内でも地域自主組織や企業やその他団体で若者との関わりのニーズがあるものの、「若者と出会う機会がない」「若者と出会っても関わり方が分からない」という状況が雲南市内にもある。
直接対象グループ	自身のキャリアに不安を抱え、地域社会で学び実践したい大学生
最終受益者	地域の若者、地域自主組織、市内の企業、行政機関、大学機関

1.2.2　事業の概要（中長期アウトカム・短期アウトカム・活動）

本事業の中長期アウトカム（目指す地域像）、短期アウトカム（活動によって目指す状態）、活動など事業の概要は下表のとおりである。

表 1-3 本事業の中長期アウトカム

時期	内容
事業開始時	事業終了後5年後に、学び成長することのできる実践フィールドを求める大学生が島根県雲南市に集まり、地域社会が大学生の成長や学びに寛容に関わり、大学生が安心して学び実践できる地域社会になる。
事前評価実施後	事業終了後5年後に、学び成長することのできる実践フィールドを求める大学生が島根県雲南市に集まり、地域社会が大学生の成長や学びに寛容に関わり、大学生が安心して学び実践できる地域社会になる。そんな地域社会で「若者と出会う機会がない」「若者と出会っても関わり方が分からない」という課題を抱える地域自主組織や企業が、期間限定の質の高いトライアルとして大学生と関わり、大学生との実践プログラムを通して出会う機会の創出・若者との関わり方を会得し、大学生の人材育成に合わせて地域社会の魅力化も行う。

※主な変更箇所、およびその理由※

- 本事業の再計画にあたり、実践の場である地域社会も重要なステークホルダーであると考え、アウトカムを直接対象者であるキャリアに悩みを抱える大学生だけでなく、地域社会も対象とし変更、これに対応する形でアウトプットも変更した。

表 1-4 本事業の短期アウトカム（事業開始時点）

事業完了時に活動によって目指す状態	指標	初期値	目標値	目標達成時期
大学生がロールモデル（理想や目標に近い地域で暮らし働く地域住民）にしたい地域住民を知っている	定量：プログラムに参加した大学生が参考にしたい地域住民の数 定性：ロールモデルとして何を参考にしたいか	定量：0人 定性：0件	定量：300人 定性：300件	2025.02
大学生の関わりを求める企業や地域自主組織がいる	定性： ・住民が大学生に求める声　・住民が大学生に影響を受けた声	定性：0件 ※これまで実施していなかったため、初期調査で実施	50件	2025.02

表 1-5 本事業の短期アウトカム（事前評価実施後）

事業完了時に活動によって目指す状態	指標	初期値	目標値	目標達成時期
大学生が、地域社会で実践する機会を通して地域住民や課題と触れることで自分自身の役割を見出し、社会的・職業的自立を可能とする原体験ができる。	定量①：地域社会で活躍する自分自身のイメージを言語化できた大学生の数 定量②：地域社会で活動するハードルが下がったかどうか	定量①：42件 (R2:22人,R3:20) 定量②：0件	定量①：50人 定量②：40人	2024.02
大学生が、地域社会で活躍する上で、ロールモデル（理想や目標に近い地域で暮らし働く地域住民やその一部）にしたい地域住民がいる。	定量：ロールモデルとなる地域住民を見つけることができた大学生の数 定性：地域住民と触れることで広がった視野	定量：0人 定性：普段の生活で培われた視野	定量：40人 定性：地域住民との交流を通じて新たな視野が広がっている	2024.02
企業や地域自主組織が、質の高いトライアルの機会として、大学生との関わりを求める。	定性：住民が大学生を求める声住民が大学生に影響を受けた声 定量：トライアルによって学生からポジティブな影響を受けた組織の数	定性：大学生との関わりが少ない 定量：0件	定性：大学生と関わりの中で地域住民にポジティブな影響がある 定量：企業7件、地域自主組織3件	2024.02

表 1-6 目指す状態のために必要な活動の結果（事業開始時点）

目指す状態のために必要な活動の結果	指標	初期値	目標値	目標達成時期
大学生がまちとつながる窓口がある	・まちとつながる窓口をつくる 【定量】 ・窓口に来た大学生の数（オンライン含む） ・窓口から地域に送り出された大学生の数″	・まちと繋がりたい大学生の窓口なし ・窓口にきた大学生の数0件 ・窓口から地域に送り出された大学生の数0件″	・オリエンテーション実施回数 10回 ・設計した実践機会の数（インターンシップ8件、フィールドワーク1件、オンライン4） ・参加した大学生の数（インターンシップ15人、フィールドワーク6人、オンライン16人）	2023.2
大学生が相談できる場所や人がいる（大学生を応援してくれる場所や人）	【定量1】活動終了後に大学生が連絡できる場所や人の数 【定量2】大学生を応援してもいいという、大学生学び応援サポーターの数 【定性】大学生を応援する地域住民の声 ※大学生学び応援サポーター（サポーターの特性に関心を持った大学生を紹介できる地域住民/場所のこと）の数″	定量1：0人 定量2：0人 定性：0件	・オリエンテーション実施回数 10回 ・設計した実践機会の数（インターンシップ8件、フィールドワーク1件、オンライン4） ・参加した大学生の数（インターンシップ15人、フィールドワーク6人、オンライン16人）	2025.02
地域と関わり合える機会がある（既存の機会の活用と、機会づくり）	【定量】既存の機会の活用 ・集まった地域の情報の数 ・参加した大学生の数 【定量】機会づくり ・2ヶ月に1回程度の地域住民講師のセミナー″	・集まった地域の情報の数 0件 ・参加した大学生の数 0件 ・セミナー実施15回 ・参加学生150人	・オリエンテーション実施回数 10回 ・設計した実践機会の数（インターンシップ8件、フィールドワーク1件、オンライン4） ・参加した大学生の数（インターンシップ15人、フィールドワーク6人、オンライン16人）	2023.03

表 1-6 目指す状態のために必要な活動の結果（事業開始時点）

目指す状態のために必要な活動の結果	指標	初期値	目標値	目標達成時期
地域で学び成長できる実践機会がある	【定量】 ・オリエンテーション実施の数 ・設計した実践機会の数 ・参加した大学生の数	・オリエンテーション実施回数 10回 ・設計した実践機会の数（インターンシップ8件、フィールドワーク1件、オンライン4） ・参加した大学生の数（インターンシップ15人、フィールドワーク6人、オンライン16人）	・オリエンテーション実施回数 10回 ・設計した実践機会の数（インターンシップ8件、フィールドワーク1件、オンライン4） ・参加した大学生の数（インターンシップ15人、フィールドワーク6人、オンライン16人）	2025.02

※主な変更箇所、およびその理由※

- 当初３年事業として計画していたものを採択金額の減少に伴い、2年事業として事業規模や事業スケジュールを中心に再計画を行った。
- アウトカムの変更に対応する形でアウトプットも変更した。
- 事前評価を実施し、それぞれの初期値を算出した。初期値に基づき、目標値を修正した。

表1-7　アウトプットに対する活動（事業開始時点）

アウトプット[No.1]に対する事業内容（活動）と実施スケジュール	
目指す状態のために必要な活動の結果	活動時期
大学生の窓口になる場所を雲南市内に探す（賃貸）	2022.08
遠隔で相談可能なオンラインの相談窓口の設置	2022.09
オンライン窓口となるHPの改修	2023.09
事業実施団体スタッフによる大学生の個別面談（地方でのキャリア選択への不安、ロールモデルの不足、気軽な体験の場がない）の実施　※1人１案件につき3回程度の面談　※オンラインと現地	2025.02
相談者に大学生の学びサポーターが選択できる仕組みづくり	2025.02

アウトプット[No.2]に対する事業内容（活動）と実施スケジュール	
目指す状態のために必要な活動の結果	活動時期
大学生の学びサポーター要件検討（ネーミングや認証制度のブランディングや登録要件）	2022.09
大学生の学びサポーター募集（地域自主組織や企業に営業する、地域住民に広く呼びかける）	2023.03
大学生の学びサポーターネットワークへの呼びかけ（大学生向けセミナーの講師募集、受け入れ先募集案内、意見交換会の開催案内）	2023.03

大学生と大学生学びサポーターと事業実施団体の3者で行う事業をより良くするための意見交換会（年2回程度　※初年度は1回）	2025.03.01

アウトプット[No.3]に対する事業内容（活動）と実施スケジュール	
目指す状態のために必要な活動の結果	活動時期
地域情報（イベント、ボランティア）の獲得をし、大学生に紹介できるように事業実施団体スタッフ間で共有。	2025.03.01
地域情報が広く周知できるようにオンライン窓口に併せて掲載できるようにする。※相談窓口での関わりを持たずとも参加できる仕組みも検討	2025.03.01
地域で1日～短期間実施されるプログラムや、長期間実施する実践プログラムの紹介をする。	2025.03.01
地域ロールモデルと出会い活動するイメージを膨らませるための、地域住民や専門家を講師に迎えたセミナー　※2ヶ月に1回程度実施	2025.03.01
学生との相談を通して、大学生のニーズや現状をまとめ、上記セミナー企画の参考にする。	2025.03.01

アウトプット[No.4]に対する事業内容（活動）と実施スケジュール	
目指す状態のために必要な活動の結果	活動時期
プログラムの新規受け入れ先開拓や希望の受け入れ先のプログラム設計	2025.02
プログラムに参加する大学生を募集し、適切にマッチングするための選考を実施	2025.02
プログラム実施中～後の大学生の定期面談と、受け入れ先とのプログラム進捗共有	2025.02
実践型インターンシップ及び、短期間プログラムの開発。オンライン対応も併せて検討する	2025.02
学生との相談を通して、大学生のニーズや現状をまとめ、上記セミナー企画の参考にする。	2025.02

※主な変更箇所、およびその理由※

- 事業終了後の継続性などを考え営業活動や販路の確保に関するアウトプットを追加。

表 1-8 目指す状態のために必要な活動の結果（事前評価実施後）

目指す状態のために必要な活動の結果	指標	初期値	目標値	目標達成時期
窓口を設置し、困難を抱える大学生の声を受け取ることができている	●困難の声を拾える窓口をつくる 【定量】 ●窓口に来た大学生の数（オンライン含む） ●窓口から地域に送り出された大学生の数	●雲南市と繋がりたい大学生の窓口なし ●窓口にきた大学生の数：42件 ●窓口から送り出された大学生の数（0）	●雲南市と繋がりたい大学生の窓口設置 ●窓口を知った大学生の数：200件 ●窓口から送り出された大学生の数：40人	2024.02

大学生が地域社会で社会的・職業的自立のトライアル期間として実践型プログラムに参加し、自分自身が持つ解決したい課題や達成したい目標設定に向かって取り組むことができるプログラムの運営をする	【定量】 ●設計した実践機会の数 ●参加した大学生の数	●設計した実践機会（インターンシップ）の数：6回 ●実践機会（インターンシップ）に参加した大学生の数：17人	●設計した実践機会（インターンシップ）の数：10件 ●参加した大学生の数：15人	2024.02
地域が大学生との関わりを通して、若者との関わり方についてのヒントを得る機会をつくる	【定性】振り返りでのヒアリング ・よかったこと ・困ったこと ・活動を通してトライしてみたいこと ・地域が若者の視野を共有でき、若者との関わり方が明確になってくる。 【定量】継続・新規で大学生を受け入れたい組織の数	【定性】0件 若者へのイメージが漠然としている。 【定量】3件	【定性】40件 若者との関わり方が明確になっている 【定量】20件	2024.02
大学生が相談できる場所や人をつなげる	●定量１：大学生が連絡できる場所や人の数 ●定量２：雲南市に大学生が訪ねてきた数 ●定量３：大学生が訪ねた雲南市の場所や人 ●定性１：大学生を応援する地域住民の声	●定量1：0人 ●定量2：0人 ●定量：0箇所 ●定性：0件	●定量1：3箇所/人、3人/人 ●定量2：20人 ●定量3：20箇所 ●定性1：13件	2024.02
実践型インターンシップを実施する受注（販売）先候補を開拓する	●定量１：営業数 ●定量２：受注数	●定量１：営業数20団体 ●定量２：受注数13団体	●定量１：営業数20団体 ●定量２受注数10団体	2024.02

表1-9　アウトプットに対する活動（事前評価実施後）

アウトプット[No.1]に対する事業内容（活動）と実施スケジュール	
目指す状態のために必要な活動の結果	活動時期

窓口「まちのキャリアセンター」として、週に3時間～6時間の枠（1時間半/人）を相談窓口として設定し、主にSNSを活用して周知する。	2022.09
週に3時間～6時間の枠（1時間半/人）で予約を受け付けて、相談業務を行う。（オンライン・現地ともに可）	2022.10
相談業務を通して、ニーズに合えば繋げ先となる地域団体や人を紹介する。	2023.09
繋げ先となる地域の情報収集を随時入手し更新する。（内部共有用に年間地域情報カレンダーの作成など）	2024.02

アウトプット[No.2]に対する事業内容（活動）と実施スケジュール	
目指す状態のために必要な活動の結果	活動時期
1ヶ月程度の実践型インターンシップのプログラム再構築と、期間や実施形態などを雲南地域に合わせたプログラムパッケージを作成	2022.10
自分を知る・地域を知る・自分の挑戦を考えるというオリエンテーションを実践大学生に向けて実施する	2024.02
実践型インターンシップを大学生に向けて周知する	2024.02
実践プログラムの活動報告を記事にして地域や大学生に向けて周知する	2024.02
雲南コミュニティキャンパス事業のうんなん大学生コミュニティとの連携	2024.02

アウトプット[No.3]に対する事業内容（活動）と実施スケジュール	
目指す状態のために必要な活動の結果	活動時期
雲南市内の企業や地域自主組織にヒアリングを実施。大学生（若者）との関わりニーズの調査を実施。	2024.02
実践プログラムの受け入れ先のヒアリングをもとに、プログラム設計。	2024.02
実践プログラムの受け入れ先の伴走	2024.02
実践プログラムの受け入れ先の終了後モニタリング	2024.02
受け入れ先のアフターフォロー（モニタリングの後の状況伺いを実施し、継続／停止／その他制度への接続など）	2024.02

アウトプット[No.4]に対する事業内容（活動）と実施スケジュール	
目指す状態のために必要な活動の結果	活動時期
活動終了後の大学生へ連絡をし現状を伺う	2024.02
大学生と関わったことのある・関わりたい地域自主組織や企業へ訪問し、現状をお伺いする	2024.02
雲南市へ訪ねてくることのできる機会を作る（必要であれば雲南コミュニティキャンパス事業と連携する）	2024.02

アウトプット[No.5]に対する事業内容（活動）と実施スケジュール【販路の確保】

目指す状態のために必要な活動の結果	活動時期
受注候補リストの作成	2023.02
営業資料の作成と営業活動	2023.02
受注確保	2024.02

1.2.3　事業設計図（ロジックモデル）

本事業における事業設計図（ロジックモデル）は下図の通りである。

図1-1　事業設計図（事業開始時点）

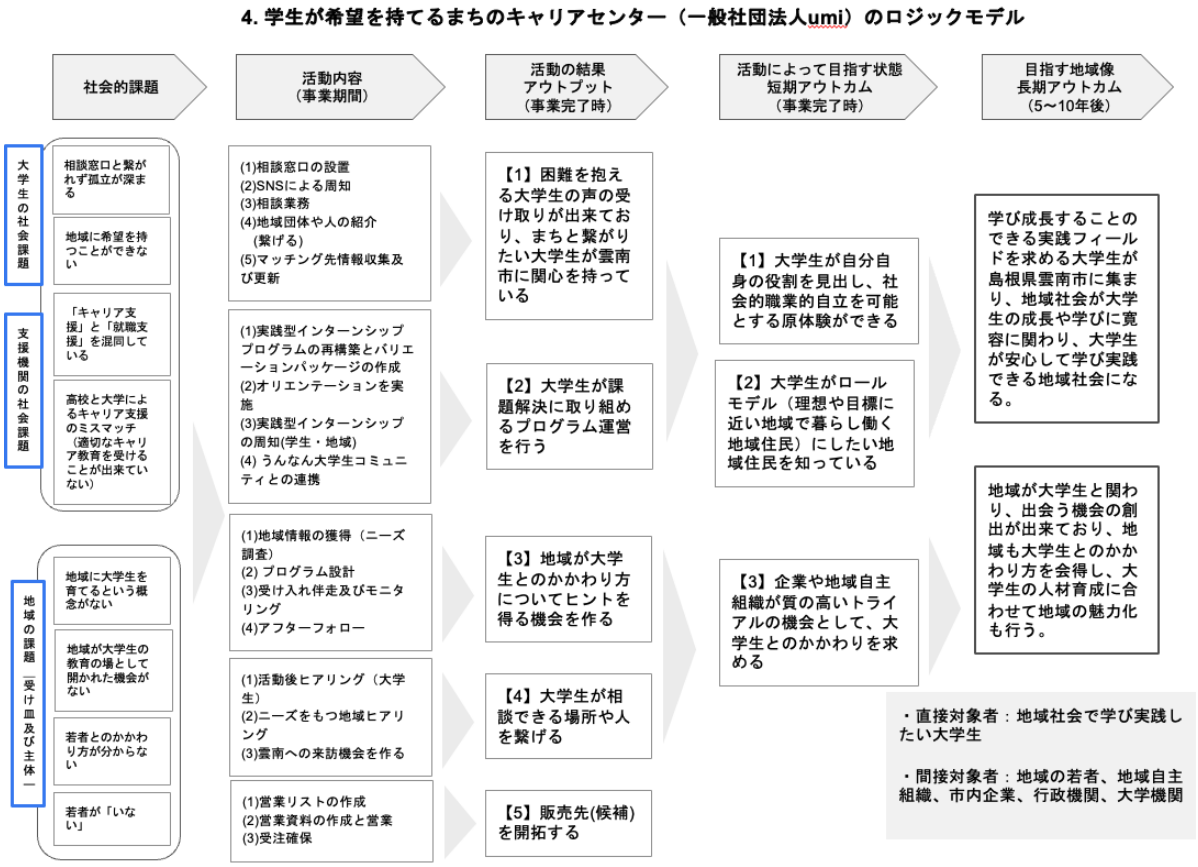


図1-2　事業設計図（事前評価実施時点）

1.2.4　事前評価実施時点で整理した直接対象者像(現状)

直接対象者の状態は三種類あり、一つ目はキャリア不安解消のために地域で活動したいが不安があり実働できていない状態、二つ目は実践を通して自己効力感が高まる状態、三つ目はキャリア感が形成されつつあるが自立（就職や将来）を悩んでいる状態である。一つ目の「地域で活動したいが不安があり実働できていない状態」は、大学進学に至るまでに関わるロールモデルの例が少なく、働くことのみならず生活することのイメージをもつ機会が少ないことで漠然とした不安を抱え、不安が曖昧であるが故に何を目指してどのようにどのように取り組むか見当がつかず、不安を解消する手段の模索すらできていない状態と考える。二つ目の「実践を通して自己効力感が高まる状態」は、地域で多様なキャリアをもつロールモデルと出会い、そのような環境で実践することで自分が目指すべきロールモデルや参考になる行動などを発見し、理想の状態になるためにはどのように行動を起こすべきか不安を解消するための手段の仮説が立つ、または行動に起こすことで自己効力感が高まる状態と考える。三つ目の「キャリア感が形成されつつあるが自立（就職や将来）を悩んでいる状態」は、自身の就職や将来を考えた時に具体的な悩みや漠然とした不安を抱え、本当にこのままキャリア形成をしていっていいのか再度自分自身のキャリアを見つめ直したいという状態と考える。加えて、事前調査により、大学生の多くはキャリアの相談先として親族や友人が主な相談相手であり、それ以外はバイト先の先輩や大学教員、キャリアセンターなどが挙げられた。特に、身内以外の相談先となる大学のキャリア相談の多くも「就職」という働くことに視点を置いたワークキャリアに偏った対応がみられる現状であり、本来のライフ・ワークキャリアの暮らしに関するライフ部分が置き去りになってしまう等の問題が発生しており、適切なキャリアの伴走者に接続できる機会が乏し

い現状となっている。直接対象者は、自身の経験を通して三つの状態を行き来しており、各状態において相談先が少ないと、悩みが解消されない、経験が昇華されないといった状態に陥りやすい。その場合、自分自身の興味関心や特性、課題の乗り越え方など、自己分析が深まりづらくなり、将来を考えた際に何を選択して良いか分からなかったり、選択先での課題を乗り越えることができないまま、さらなる困難を抱える可能性がある。これまでの事例として挙げられるのは、周囲の行動に合わせて手当たり次第に多種多様の業界の採用試験へエントリーし最初は必死に取り組むが、ある日突然このままで良いのかという漠然とした不安に押し寄せられたり、またそうした不安を押し殺したまま就職活動へ取り組むことで、自分自身の心身に影響する危険信号に鈍くなっている事例があった。こうした不安に鈍くなることで、大学卒業後の自分自身の働き方や暮らし方に課題を抱えるも、理想の状態がわからず解消するすべがなくなり、心身に影響が出る状況が起こりうる。
また、直接対象者となる大学生には、相談に至るまでの段階があるということがわかった。こうした直接対象者となる前段階の大学生は、相談するに至るほど課題が具体的になっておらず、漠然とした状態では窓口を利用しないということが判明し、自身のキャリアに向き合うためには多くの場面できっかけや支援が必要であることが分かった。

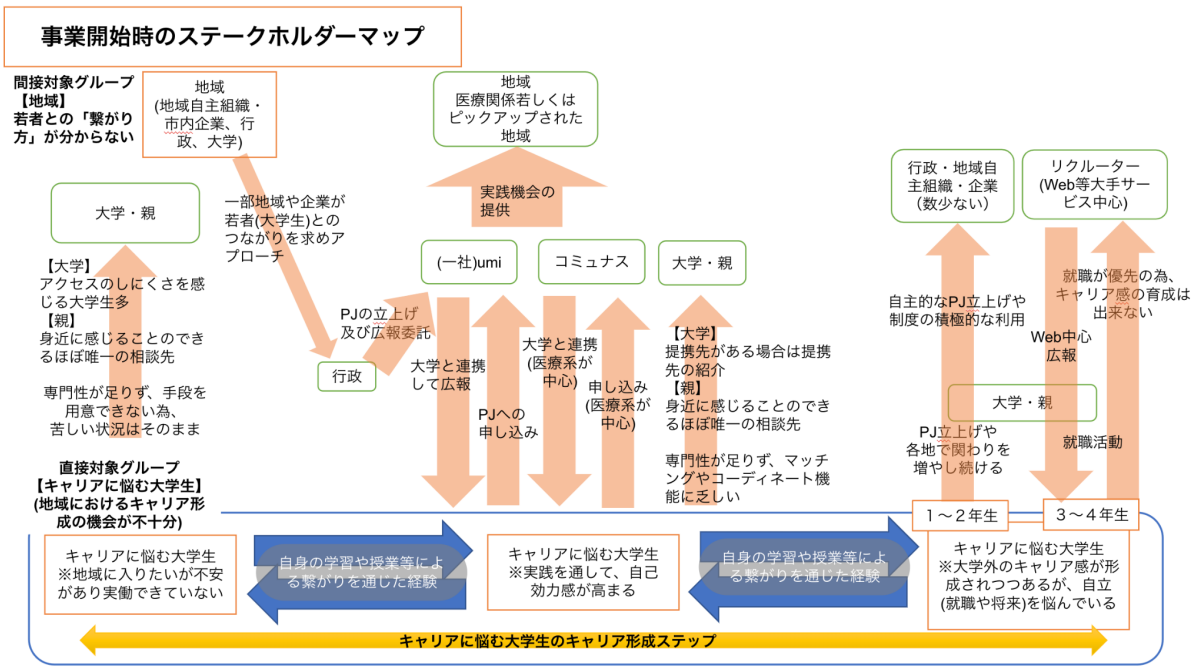


図1-3　ステークホルダーマップ（事前開始時）

1.2.5　出口戦略の概要

本事業における出口戦略に関しては以下の4点である。

1. 実践型インターンシップやフィールドワークなどは、受け入れ先にとっての価値を明確にすることで費用を値上げし、最低限の運営費を賄えるようにする。そのほか、地域住民や企業に寄付を募る。
2. 大学生が自ら地域で挑戦できる機会を作れるように、運営にもインターンシップ生を導入していく。
3. 実践機会をこちらで用意するだけでなく、大学生サポーターに大学生が直接問い合わせでき自ら実践機会を作れるような仕組みを検討する。
4. 大学生を単なる人員として活用するのではなく、次世代の担い手として育成することの意味を2023年度まで考え、今後行政事業として再び力を入れていただくよう2024年に交渉する。

2.　事後評価実施概要

2.1　実施概要

2.1.1　どんな変化をこの事業の重要なポイントとして設定し評価を実施したのか

大学生においては、学び成長することのできる実践フィールドを求める大学生が地域社会と関わることを通して悩みを解消することができるかどうかを重要なポイントとして設定した。地域においては、地域社会が大学生の成長や学びに寛容に関わることができる状態であるかを重要なポイントとして設定した。

2.1.2　調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか

アウトプット等の実施事業については、各事業実施ごとに振り返りを行いまとめた。これらの事業の振り返りに加え、アウトカムの評価基準に合わせてアンケート収集も行い、必要に応じてヒアリングを行った。そのヒアリング内容についても内部で協議を行いどのような要因でそれぞれの結果が生じたのかを考察した。

2.2　実施体制と実施時期

本事業の事後評価における評価実施体制は下表の通りである。また評価は2023年11月から2024年3月にかけて実施するものとする。

表 2-1 本事業の事後評価における評価実施体制

内部/外部	評価担当分野	氏名	団体・役職
内部	事業報告書の確認 事業報告後の方針検討	山下 実里	一般社団法人umi 代表理事
内部	事業報告書作成 評価方法の確定と実施	伊藤 薫	一般社団法人umi
外部	プログラムオフィサー	坂本 逸志	公益財団法人うんなんコミュニティ財団PO

2.3　評価項目と測定方法

評価項目と測定方法については以下の通りである。

表 2-2 本事業の事後評価における評価項目と測定方法

評価の要素	評価項目	評価小項目(例)	判断方法（指標）	判断基準（目標値）	情報源 調査手法・データ収集方法

アウトカムの分析	アウトカムの達成度	大学生が、地域社会で実践する機会を通して地域住民や課題と触れることで自分自身の役割を見出し、社会的・職業的自立を可能とする原体験ができる。	定量①：地域社会で活躍する自分自身のイメージを言語化できた大学生の数	定量①：50人	●参加学生へのアンケート調査 ● 地域社会で活躍する自分自身のイメージ像（定性）
			定量②：地域社会で活動するハードルが下がったかどうか	定量②：40人	●参加学生へのアンケート調査 ● どのような観点・要因でハードルが下がったか（定性）
		大学生が、地域社会で活躍する上で、ロールモデル（理想や目標に近い地域で暮らし働く地域住民やその一部）にしたい地域住民がいる。	定量：ロールモデルとなる地域住民を見つけることができた大学生の数	定量：40人	●参加学生へのアンケート調査
			定性：地域住民と触れることで広がった視野	定性：地域住民との交流を通じて新たな視野が広がっている	●参加学生へのアンケート調査 ● 相談窓口、インターンの振り返りで収集したナラティブデータ ● どのような視野が広がったか（定性） ※気づき、学びに値する学生の声 ● どのような交流によって広がったか（定性）
		企業や地域自主組織が、質の高いトライアルの機会として、大学生との関わりを求める。	定性：住民が大学生を求める声住民が大学生に影響を受けた声	定性：大学生と関わりの中で地域住民にポジティブな影響がある	●インターンの受け入れや営業などで得られた住民のナラティブデータ
			定量：トライアルによって学生からポジティブな影響を受けた組織の数	定量：企業7件、地域自主組織3件	●ポジティブな影響を受けたと判断できる具体的な出来事 ● その発現が見られた組織の数
	波及的成果	事業実施にあたって当初想定していなかった副次的・波及的な効果があったか	定性：事業実施にあたって発生した波及効果に関する事例が存在するか	事業実施における波及効果について、どのような効果があったか、またその要因について整理ができている。	● 関係者間でのディスカッション

	事業の効率性	事業に投資したリソースに対して、実施した内容が効率的であったか	事業に投資したリソースが、適切に活用されている	●事業に投入したリソースが明らかになっている。 ●投入したリソースがアウトカムの達成にどのように寄与したか整理できている。	●予算の執行状況 ●関係者間でのディスカッション
成功要因と課題の検証	社会課題解決に貢献したアウトカム	社会課題解決に貢献したアウトカムと、その貢献要因が何か	事業計画時の目標値に対して実績値が上回っている	社会課題解決に貢献したアウトカムと、その貢献要因が何か整理できている。	●アウトカムの達成状況 ●関係者間でのディスカッション
	達成は困難であったアウトカム	達成が困難であったアウトカムと困難であった要因が何か	事業計画時の目標値に対して実績値が下回っている	達成が困難であったアウトカムと困難であった要因が何か整理できている。	●アウトカムの達成状況 ●関係者間でのディスカッション
事業の妥当性の検証	実施状況の妥当性	事業で実施した内容が目的、計画に対して妥当であったか	事業の実施内容、達成したアウトカムが目的とする社会課題解決に対して寄与できているかどうか	事業の実施内容、達成したアウトカムが目的とする社会課題解決に対して寄与できたとする要因が整理できている。	●アウトカムの達成状況 ●関係者間でのディスカッション
	アウトカム変更の妥当性	変更したアウトカムとその変更理由が妥当であったか	変更したアウトカムに対して、目的とする社会課題対決のための成果があらわれているかどうか	変更したアウトカムに対して、目的とする社会課題対決のための成果があらわれている。	●アウトカムの達成状況 ●関係者間でのディスカッション

2.4　対象事業地域の背景

島根県雲南市は、総合戦略に基づき若者のチャレンジや関係人口を促進する為、大学生向けのインターンシップやフィールドワークを通して課題解決人材を育成する事業に取り組んでいる。代表理事は雲南市の地域おこし協力隊としてこれらの事業に8年前の2017年から携わっている。この間、事業実施地域の企業・地域自主組織・団体など多くの方と事業を通してご縁をいただき、お誘いいただいたイベントや機会には喜んでお伺いさせていただき、その中で事業のご相談をさせていただくなど関係性を育ませていただいた。こうした関わりの中で、「大学生

のキャリア観」という、大学がない地域では縁遠いような課題に対して耳を傾けていただけるなど厚いご協力をいただくようになった。日頃から課題が溢れる地域において課題解決が急がれる最中、若者の人材育成という短期間で成果が現れづらい事業に対して、理解しようと関わり続けてくださった方々、共に大学生の受け入れに励んでくださった方々がいたからこそ、地域に関わる大学生が年々増えている。本事業を推進することができたのは、雲南市に関わる大学生だけでなく、事業主体（umi）をも地域の方々に応援いただける環境であるからこそ成り立つ事業である。

3.　事業の実績

3.1　インプット

3.1.1　人材

本事業における主に活動していたメンバーやその役割については以下の通りである。

表 3-1 本事業における人材のインプット

内部/外部	役割	氏名	団体・役職
内部	事業計画立案・運営 インターン設計・伴走 窓口の相談対応 営業活動	山下 実里	一般社団法人umi 代表理事
内部	組織基盤強化 事業相談役 外部連携先開拓	佐藤満	一般社団法人umi
内部	事業計画立案・運営 インターン設計・伴走 窓口の相談対応 営業活動 精算管理 報告書等とりまとめ	伊藤 薫	一般社団法人umi
内部	広報	石坂 志乃	一般社団法人umi
外部	経理	堀内結子	NPO法人おっちラボ
外部	プログラムオフィサー	坂本 逸志	公益財団法人うんなんコミュニティ財団PO
外部	外部評価アドバイザー	鴨崎貴泰	認定特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会

3.1.2　経費と自己資金

本事業における経費に関しては下記の通りである。

表 3-2 経費

	契約当初の金額（円）	実際に投入した金額（円）
事業費総額	6,414,600	5,927,977
直接事業費	4,994,400	4,736,354
自己資金	940,200	940,200
管理的経費	240,000	240,000
評価関連経費	240,000	60,000

当初の計画と実際の投入金額の差の主な要因は、当初計画していたインターンシップ実施が令和5年8月から行政の委託事業として実施できるようになった為、同月より休眠事業としてのインターンシップ事業実施を終了し、窓口等アウトリーチに特化した活動へ以降したことによるものである。

自己資金はプログラムコーディネートによる収益を主とし、直接事業費として投入した。

また自己資金調達の際の工夫として、

- プログラム実施に向けた受け入れ先開拓のための営業資料の作成
- 受け入れ先にニーズに合わせ、サービスのパターンを複数作成
- 上記を用いた営業活動
- プログラムの受け入れ先が、プログラムを実施するにあたって利用できる補助金などの情報収集

を行った。

3.2　活動とアウトプットの実績

3.2.1　主な活動

各期ごとにおける主な活動は、窓口イベントやインターンシップ実施などのプログラム実施に加え、情報発信としてパンフレットの作成や相談窓口の実施と出口戦略を立てるためのアドバイスを受けるなどした。その他、コーディネーター育成のための視察や研修にも取り組んだ。

活動状況は下の表の通りである。

表 3-3 各期ごとの主な活動

年	月	主な活動
2022年	4月～6月	事前評価
	7月～9月	営業資料の作成 営業活動開始 自社インターンシップ（２件）
	10月～12月	実践型インターンシップ（1件） 相談窓口業務開始 コーディネーター養成講座
2023年	1月～3月	中間評価 東川町視察（Vision Hackers Camp）
	4月～6月	宮崎県日南市・川南町・高千穂町視察（Vision Hackers Camp） 中間評価 まちのキャリアセンターの在り方検討開始
	7月～9月	実践型インターンシップ（3件） 自社インターンシップ（4件） Vision Hackers Camp　最終報告会

	10月～12月	事後評価 相談窓口イベント（1件）
2024年	1月～3月	事後評価 奈良県奈良市（Bonchi）視察 相談窓口イベント（4件）

またアウトプットの実績概要は下表の通りである。

表 3-4 目指す状態のために必要な活動の結果

目指す状態のために必要な活動の結果	指標	目標値	目標達成時期	実績値
窓口を設置し、困難を抱える大学生の声を受け取ることができている	●困難の声を拾える窓口をつくる 【定量】 ●窓口に来た大学生の数（オンライン含む） ●窓口から地域に送り出された大学生の数	●雲南市と繋がりたい大学生の窓口設置 ●窓口を知った大学生の数：200件 ●窓口から送り出された大学生の数：40人	2024.02	●窓口を設置 ●窓口を知った大学生の数：1419名 ●窓口に来た大学生の数：134名（ユニーク71名） ●窓口から地域に送り出された大学生の数：94名（ユニーク44名） ※ユニーク：同一人物を除いた数
大学生が地域社会で社会的・職業的自立のトライアル期間として実践型プログラムに参加し、自分自身が持つ解決したい課題や達成したい目標設定に向かって取り組むことができるプログラムの運営をする	【定量】 ●設計した実践機会の数 ●参加した大学生の数	●設計した実践機会（インターンシップ）の数：10件 ●参加した大学生の数：15人	2024.02	設計した実践機会の数:6件 参加した大学生の数：14人
地域が大学生との関わりを通して、若者との関わり方についてのヒントを得る機会をつくる	【定性】振り返りでのヒアリング ・よかったこと ・困ったこと ・活動を通してトライしてみたいこと ・地域が若者の視野を共有でき、若者との関わり方が明確になってくる。	【定性】40件 若者との関わり方が明確になっている 【定量】20件	2024.02	【定性】25件 ●どんな方が来られるのか会うまで分からなかった。どこまでできるのかわかるまではどうしても時間はかかる ●大学生だから…といって特別扱いすることなく、一人のスタッフ・ともに活動する仲間として接していた 人材不足で悩んでいたので、今の若者が考え

	【定量】継続・新規で大学生を受け入れたい組織の数			てることがインターン生を通じてわかる ●「受け入れ先のインターン生」ではなく「雲南市のインターン生」という認識で受け入れたのが、受け入れ先の関係者も含めて広い視野を持ってもらえたのでよかった。 【定量】19件
大学生が相談できる場所や人をつなげる	●定量１：大学生が連絡できる場所や人の数 ●定量２：雲南市に大学生が訪ねてきた数 ●定量３：大学生が訪ねた雲南市の場所や人 ●定性１：大学生を応援する地域住民の声	●定量1：3箇所/人、3人/人 ●定量2：20人 ●定量3：20箇所 ●定性1：13件	2024.02	（対象者25名より） 定量1：1～3箇所/人 定量2：15人 定量3：54箇所 定性1：10件
実践型インターンシップを実施する受注（販売）先候補を開拓する	●定量１：営業数 ●定量２：受注数	●定量１：営業数20団体 ●定量２受注数10団体	2024.02	●営業数：13団体 ●受注数：5団体

3.2.2　活動を通した直接対象者の変化

活動を通して、直接対象者とどのように手を握り、手を握り続け、地域と繋げるのかをまとめた図は以下のとおりとなる。本事業で行った主な工夫は、仕組みづくりではなく個々の繋がりの強化である。手を握る段階において直接対象者と事業主体（umi）の関係構築を丁寧に行い安心して相談できる環境を基盤に整えることで、手を握り続ける段階からは直接対象者が安心して意思決定・行動に移せるようになる。詳細はアウトプットの実績とアウトカムの分析による。

手を握る

HPやFacebook/Instagramなどの公式SNSを活用し、umiの事業を伝えることを通して周知をした。また、悩みや不安をもつ人は、「誰に相談するか」を重要視していると仮説を立てた。対象者の友人・先輩・教員など既存の相談相手もいるが、それぞれの関係性から相談できない状況もある。umiが新たな相談先となるために、umiスタッフが大学へ直接行ったり、SNSを個人の意見として発信することで、安心して相談できる存在であるということを知ってもらう工夫を行った。その際には、直接対象者の意思決定の重要なステークホルダーとして挙がってくる親(保護者)や親族の重要性も認識し、情報発信する際、繋がり作りの際に留意した。

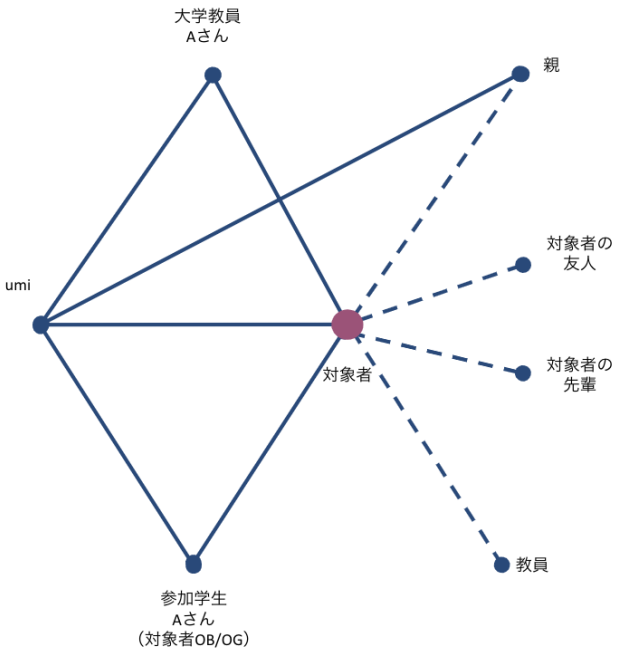


図3-1　直接対象者と手を握る

手を握り続ける

手を握った対象者の悩みや不安、将来の理想像などを伺う中で、適切な行動を自身で選べるようにコーディネートする。その選択において地域社会での活動がキャリア観を育むために適切であると判断された場合、umiがもつ繋がり先を紹介する。その選択において、対象者に選択する権利があるため、あくまでも対象者の持つ潜在的な意志を引き出し、浮上した選択肢の中から選んでもらう形式をとっている。

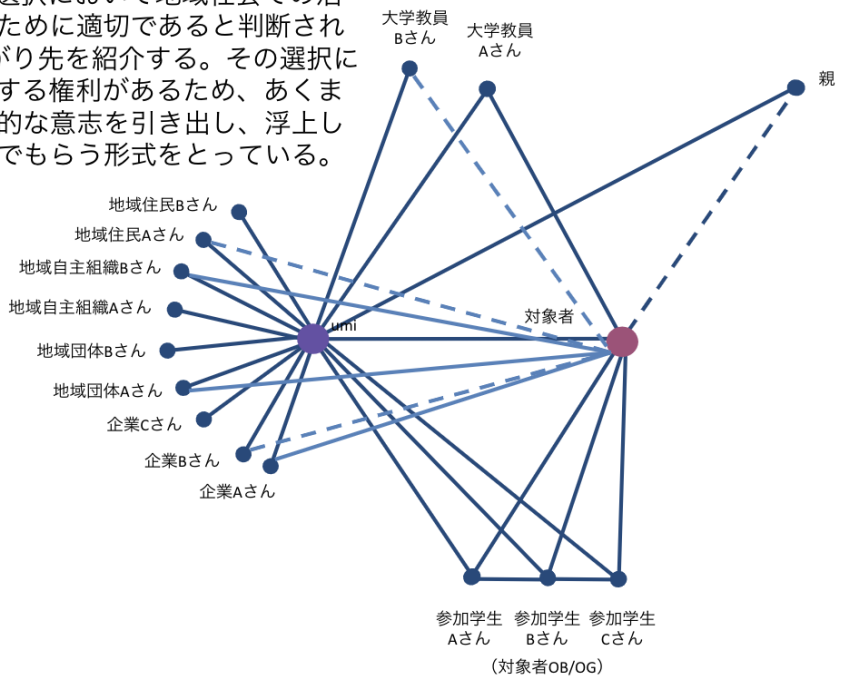


図3-2　直接対象者と手を握り続ける

地域に繋げる

対象者自身の意志で行動の意思決定をすることで、地域で繋がりを持ちに行った人に対して能動的に関わることができ、それによりさらなる意思表示をすることで、繋がりを持った人がさらなる繋がりの選択肢を提示してくれる。それにより、対象者が地域でつながる人が増え、地域社会の中で自分自身の居場所を見つけることができる。

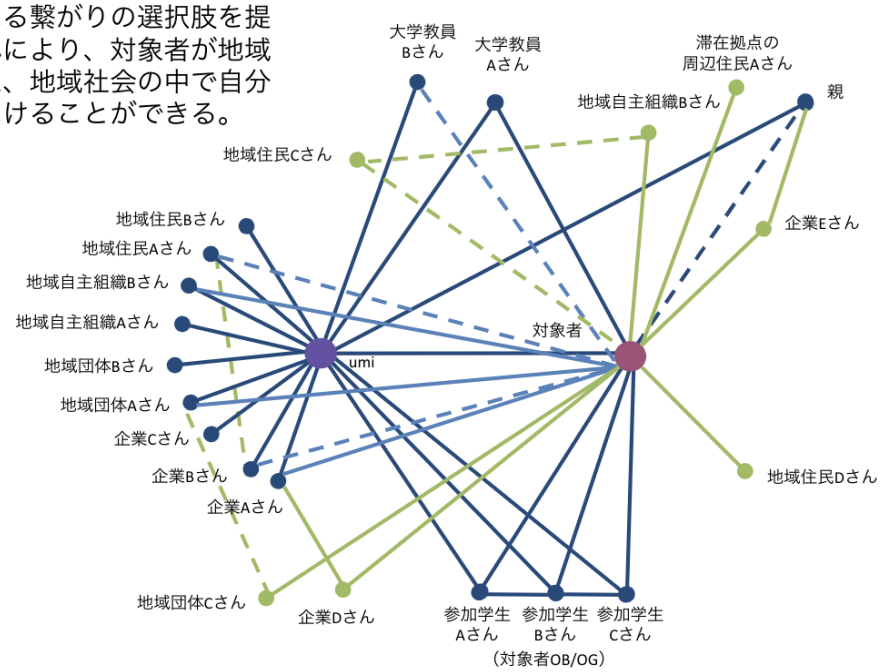


図3-3　直接対象者を地域に繋げる

3.2.3　アウトプットの実績

(1)窓口を設置し、困難を抱える大学生の声を受け取ることができている

①判断基準（指標）

- 困難の声を拾える窓口をつくる
- 窓口に来た大学生の数（オンライン含む）
- 窓口から地域に送り出された大学生の数

②評価方法

- 相談窓口にきた大学生の数、相談内容を整理する。
- 相談窓口に来た大学生にアンケートを実施し、窓口で相談した後の行動を把握する。

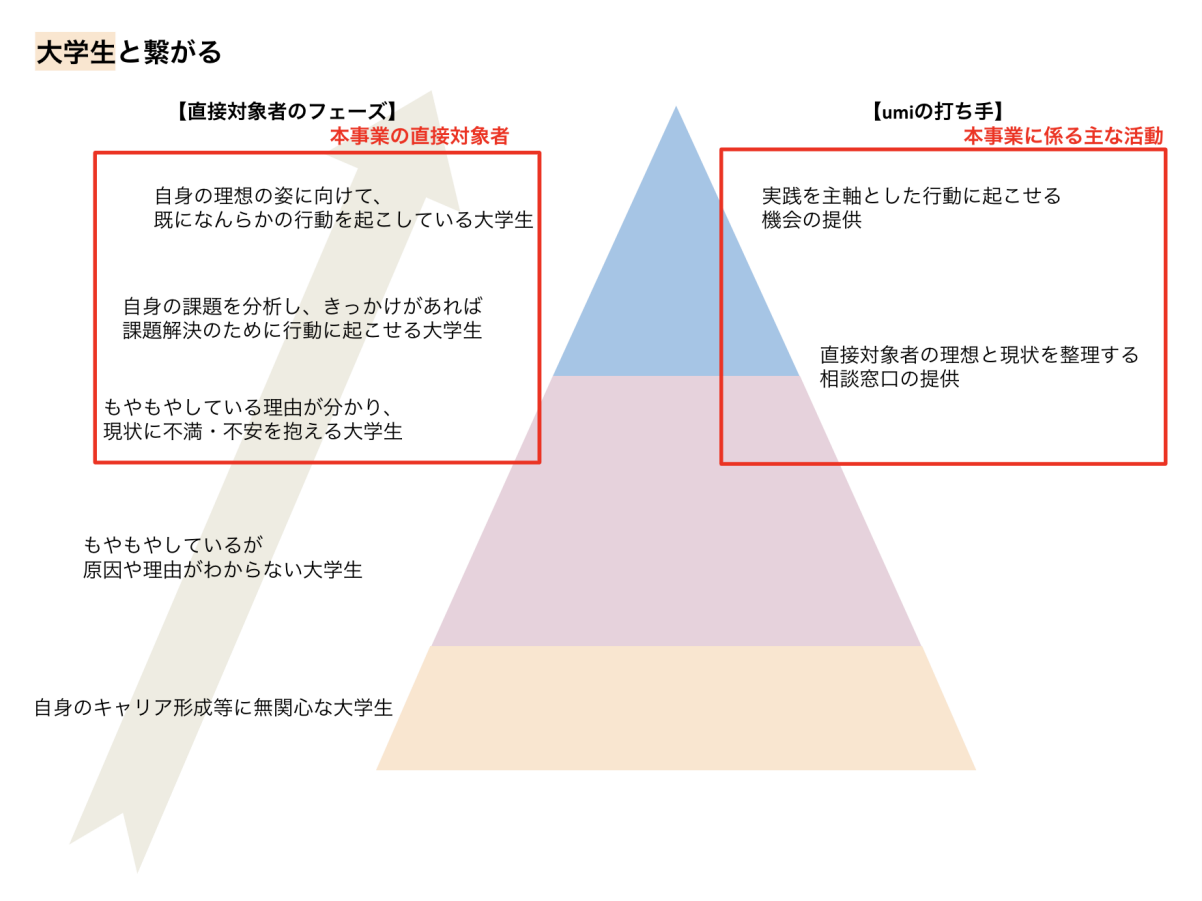
③結果

- 常設の窓口を設置するのが人員不足により困難であったため、定期的にイベントのような形で相談会を実施、そのほか学生から希望があった場合に随時相談を受け付けた。
- 窓口に来た大学生の数（オンライン含む）　134名（ユニーク71名）
    - ○ 相談会イベントの実施日程のその際の参加人数
        - ■ 2023/12/05　10名
          場所：島根大学キャンパス内　学生市民交流ハウス
        - ■ 2024/1/23　16名（全体では18名：社会人2名）
          場所：島根大学キャンパス内　学生市民交流ハウス
        - ■ 2024/2/27　8名（全体では11名：高校生1名、社会人2名）
          場所：三日市ラボ（島根県雲南市木次町）
        - ■ 2024/3/1　2名（全体で4名：社会人2名）
          場所：三日市ラボ（島根県雲南市木次町）
        - ■ 2024/3/13　5名（全体で7名：社会人2名）
          場所：三日市ラボ（島根県雲南市木次町）
    - ○ イベント外で受け付けた人数：93名
    - ○ SNS窓口を知った人の数：1419名（Facebook528名、Instagram891名）
        - ■ フォロワーの属性
            - ● Facebook
              フォロワー203名
              男性65.3%、女性34.7%
              18歳～24歳　16.8%
            - ● Instagram
              フォロワー258名
              男性57.8%、女性42.2%
              18歳～24歳　39.6%
- 窓口から地域へ送り出された大学生の数　94名（ユニーク44名）
- 相談内容に関する傾向
    - ○ これまで地域で活動していた学生からの就職に関する相談の増加傾向あり
    - ○ 地域での取り組む活動範囲を広げすぎて、やりたいことと自身のスキルが追いつかないという相談もあった

④考察

窓口設置を行うことで繋がれる直接対象者の特性としては、自身の課題を分析し、きっかけがあれば課題解決のために行動に起こせる大学生であり、その中には自身の理想の姿に向けて既になんらかの行動を起こしている大学生もいた。窓口においては、課題解決のための踏み出し方や、その上での困難の乗り越え方、また行動を起こす中での次なる課題について相談を受けることが主であった。

また、事前評価により、直接対象者となる大学生には、相談に至るまでの段階があるということがわかった。こうした直接対象者となる前段階の大学生は、相談するに至るほど課題が具体的になっておらず、漠然とした状態では窓口を利用しないということがわかった。そのため、本事業の直接対象者に至るまでのフェーズの大学生と、いかに繋がるか方法を模索した。その結果については、波及効果（4.4.2　波及効果）に記載する。



相談窓口設置により、分かったことは以下の通りである。

- ○ 相談窓口として問い合わせを受けたりイベントを開催したりするよりも、普段の相談は何気なく話せるように「いつでも連絡してね」という声かけを実施したり、イベントでは雑談会や座談会として開催することで、相談しなければいけないという強制的な空間ではなくなり、何気なく話す中で自然と悩みが打ち明けられることがわかった
- ○ イベントに参加した学生のうち、個別相談を別途受けたいという回答は11名中2名であった。イベント参加者41名のうち回答数が11名と少なかったことは、初回はアンケートがなく、個別相談に関する設問は3回目以降の開催アンケートに設けたことが理由である
- ○ イベントを開催せずに個別相談を実施していた当初は、悩みを抱える学生と話をとにかく聞いてほしい学生が混在しており、個別相談に時間を要することが課題となっていた。イベントを開催することで、両者の分類をすることができたと同時に、悩みを抱える一定の参加者はイベント参加後に個別相談を希望する者もいたため、個別相談のニーズもあるということもわかった。また、個別相談が必要と思われる学生も一定数見受けられるが、umiとの関係性が希薄なため個別相談とならない場合に、まずはイベントでのumiとの関係性構築をすることで個別相談へ移行しやすいということがわかった。
- ○ 教育コーディネーターや地域づくりの中間支援組織との関わりが濃い学生ほど、そうした人に憧れをもつ傾向にあり、また就職活動において実際の仕事と憧れの仕事に対してギャップを持つということがわかった

○ 地域に出た学生はしばし興味のあることに積極的に関わるが故に、全て中途半端になったり取り組む優先順位に悩む傾向があるということがわかった
○ 心理的な安心安全の関係性を積み上げていくために、ラポールの形成を意識した。非言語的スキル（視線・表情・声質・服装など）を確認した上で、「受容」「伝え返し」「感情や意味の意識化（共感的理解）」「支持（相槌など）」「質問」を適切な段階で活用することが主に意識したことだ。
○ 窓口から地域に送り出された大学生はのべ94名となるが、窓口をリピート利用する大学生もいたためユニークとしては44名となり、当初の目標値通りとなった。
○ 窓口に来た大学生の数については、当初目標値には入れていなかったが、地域へ送り出される大学生が目標値に到達するためには、本事業の2年間を通して130名以上の相談対応をする必要があるということがわかった。
○ 相談窓口を通して出会う地域住民は、個人事業主・マルチワーカー・起業家・農家など、さまざまなキャリアの方が多い。「大学を卒業したら企業に就職するものだ」という考えに囚われて悩んでいる大学生にとっては、視野を広げるきっかけになり、将来の働き方や暮らし方の選択肢を広げる機会となることがわかった。

以上の情報から窓口を設置し、困難を抱える大学生の声を受け取ることができていると考える。

表 3-5 大学生が困難を抱える社会的な構造要因

設定した社会課題	課題に対する問い	相談を通して見えてきた構造的要因
大学や身の回りの人以外の相談先に困り、誰に相談して良いか分からずに孤立してしまう。	なぜ、大学や身の回りの人以外の相談先に困るのか	● コロナ禍の影響もあり繋がりが希薄（環境による強制が少なくなっている） ● キャリア教育の多様化に対し、サポート体制の構築が不十分（＝進路指導ではない ● 情報を得る手段自体は充実している（複数のプラットフォームがあるため適切な手段をみきわ得る必要がある/ITへの強さなど相対的に都会の情報が多い、といった課題はあり）
	大学や身の回りの人ではなぜ不十分か	● 相談先として信頼しきれない 　○ 親子関係の悪さなど：心理的な安心・安全性が低い 　○ そもそも悩みの原因が身内の場合があり、第三者に相談する必要がある ● キャリアの多様化も進み、自身が望むキャリアに対して、参考になるアドバイスを受けることのできる人が存在しない ● ついアドバイスをしがちだが、そもそも本人が何に悩んでいるのかを言語化できないという状況にあるため、問いかける関わりができる人が必要
学外に出てみても、キャリア不安への解決につながらず、学外（地域社会）に希望を持てないままキャリア形成を迎えてしまう	なぜ、キャリア不安の解決につながらないのか	● 地域側に大学生を育てるという概念が浸透していない ● 大学生の教育の場として開かれた機会・場所がない ● 大学生の悩みに対応できることや解決のための機会提供ができる機能や人材が地域にない
	地域社会に希望をもたずキャリア形成を	● 相対的に情報を得にくい地方や中小企業に人が流れにくくなる

	迎えることの何が悪いか	● キャリアを形成する要素に偏りが生まれる/要素が少なくなる ● 希望を持てないと積極的な選択になりにくい（不安や不満を残したまま選択してしまう）

(2)大学生が地域社会で社会的・職業的自立のトライアル期間として実践型プログラムに参加し、自分自身が持つ解決したい課題や達成したい目標設定に向かって取り組むことができるプログラムの運営をする。

①判断基準（指標）

- 設計した実践機会の数
- 参加した大学生の数

②評価方法

- 休眠預金事業内で実施したインターンシップ（実践プログラム）について整理する。

③結果

- 設計した実践機会の延べ数：市内5件（自社含む）、市外1件
- 参加した大学生の数：15名（うち1名辞退）
- 受け入れ先と参加人数の内訳

実施期間	受け入れ先	参加人数
2022.08~09	自社	3名
2022.10~12	光プロジェクト株式会社	2名
2023.08-09	自社	6名
	大原森林組合	2名
	公益財団法人うんなんコミュニティ財団	1名
	株式会社島根人材育成	設計のみ 途中辞退

※それぞれのインターンシップの詳細は参考資料を参照

まず、大学生が参加できる地域社会で社会的・職業的自立のトライアル期間をつくるために、実践プログラムとして1ヶ月～1ヶ月半のインターンシップを設計した。その際に、地域社会で社会的・職業的自立のトライアル期間となるように、受け入れ先の実際の事業課題・組織課題やそれぞれの理想の状態などを伺った上で、想定される打ち手と仮説を明確にし、その中から学生が取り組めるテーマをインターンシップで取り組むテーマとしてプログラムの設計を行った。

また、インターンシップに選考を経て参加した学生は、事前に目標設定をする機会を設けた。その中では、自分自身が持つ解決したい課題や達成したい目標を設定し、限られた期間の中で取り組めるようにスケジュールを受け入れ先と相談していただいた。ここで設定した目標を元に、中間振り返りや最終振り返りを学生・受け入れ先・umiで実施することで、目標を再認識し、また目標に対しての現在地など把握、理想と現状の差を埋めるために何をするべきかを考える機会となった。また、学生や受け入れ先の様子に異変などがあった際は、個別に相談をし現状の把握をした上で、取り組みを遂行するために必要な打ち手を共に検討した。こうした

異変にいち早く気づくために、学生には活動日に必ず日報を提出することを義務化し、受け入れ先との日々のコミュニケーションツールとしても活用をしていただいた。

④考察

以上の情報より、休眠預金事業内で実施したインターンシップ（実践プログラム）について整理することができたと考える。学生からは、目標設定をすることに対して「当初は受け入れ先や関係者のことがわからず、曖昧な表現が多かったが、取り組む中で目標が具体的になってきた。目標設定をしたことで自分自身の成長について気づくことができた。」という意見をいただき、こうした目標設定の機会を設けたことはもちろんだが、日報や中間振り返り、最終振り返りを実施することで、初期に設定した目標を定期的に振り返ることができ、気づきを言語化することに繋がったと考えられる。

2023年12月以降は、実践プログラムとしてのインターンシップを別事業で実施することになり、事業終了後の継続方法についても確保することができた。こうした理由から、受け入れ企業や団体となる組織の数が、目標値よりも少なくなった。

(3) 地域が大学生との関わりを通して、若者との関わり方についてのヒントを得る機会をつくる。

①判断基準（指標）

- 【定性】振り返りでのヒアリング
  - ○ よかったこと
  - ○ 困ったこと
  - ○ 活動を通してトライしてみたいこと
  - ○ 地域が若者の視野を共有でき、若者との関わり方が明確になってくる。
- 【定量】継続・新規で大学生を受け入れたい組織の数

②評価方法

- インターンの最終振り返り等で学生、受け入れ組織にヒアリングを行い、得られた情報を整理する。

③結果

- 【定性】振り返りでのヒアリングを通して若者との関わり方が明確になっている
  - ○ 個々の学生との関わり方
    - ■ 人材不足で悩んでいたので、今の若者が考えてることがインターン生を通じてわかった。
    - ■ 新卒スタッフがインターン生の行動や発言から学ぶことができた。
    - ■ 業務の振り分け方（分量だけでなく伝え方）、経営者・プロジェクトマネージャーとしてのスキル・マインド両面での能力の向上。
    - ■ どんな方が来られるのか会うまで分からない。どこまでできるのかわかるまではどうしても時間がかかる。最初の１週間の関わり方が重要。
  - ○ 組織全体と学生との関わり方
    - ■ 普段笑わない様子の職員が学生を通して和やかに笑いながら話していた。
    - ■ 各部門に担当者がおり、人材不足のため個々に頑張るしかなかったが、インターン生が加わることで、二重チェックをする補佐的役割を担ってくれた。
    - ■ インターン生の企画を通して、これまで関わりたかった機関と繋がることができた。
    - ■ インターンシップを通して、この地域には、もともと新しい人や試みを受け入れる土壌がありそうだと気づいた。 事業の規模にこだわらずに「やってみよう」という意識に変わっている。
    - ■ インターンの子が、友達の大学生を活動に連れてきてくれたりしたので、スタッフの学生さんとの交流の機会が増え、20代の子の考えや視点を知ることができた。そこから、SNSの発信の方法なども変えていった部分もある。
  - ○ 学生との今後の関わり方について
    - ■ 思った以上にスキルのある学生が来た。もう少し、学生っぽい（社会での活動に慣れていない）方が来たらどうなるか試してみたい。

        - 作成したツールを広めていくために学生に来てもらい、アイデアを出したり実践したりしてみてほしい。関わり方はインターンシップという形式でなくても良い。
    - 地域が若者の視野を共有でき、若者との関わり方が明確になってくる。
        - 大学生だから…といって特別扱いすることなく、一人のスタッフ・ともに活動する仲間として接していた。
        - 参加した学生と自分の子どもが同じ世代なので、子どもと進路やインターンシップについて話した。
        - できる人だから採用するのではなく、やりたいという思い、ポテンシャルがあるかどうかを判断する基準にしたい。
        - 体験して考えてもらうことが大事だと思う。完璧にできるとは思っていない。
        - 欲しい人材として、積極的に発言してくれる子、しんどいなら「しんどい」とヘルプを出してもらう必要がある。それができるかどうかが、選考での判断基準の一つになるかもしれない。
- 【定量】継続・新規で大学生を受け入れたい組織の数
    - 継続
        - 4団体
    - 新規
        - 15団体
            - 他団体がインターンシップを受け入れていて関心を持った
            - umiのビジョンに共感して受け入れをしたいと思った
            - 若者（学生）が大学のないまちにいることでまちに活気づくので、そこに自社も貢献したい。
            - 新卒採用に向けてインターンシップで学生と関わりを持ってみたい
            - アルバイト等の人材が不足している
            - 学生の奇想天外な考えなどに期待をしたい

④考察

以上の情報より、インターンシップの受け入れをした団体は学生の関わりを通して良いことや課題も含めて気づきを言語化することができ、言語化して初めて若者との関わり方について認識したり、関わって初めて学生の考えていることや世代的な特徴を知り、若者との関わりについてのヒントを得る機会となっている。また、このような影響を及ぼした要因として、事前の目標設定において学生の考えや視野を受け入れ先と共有したり、学生が書いた日報を通して学生の考えを知った上で受け入れ先の考えをコメントとして記入しコミュニケーションをしてもらうこと、さらには状況に応じた面談や事例となる他地域の例を紹介することなどが考えられる。こうした仕組みは、実践プログラムづくりにおいて重視しており、効果的であったことが分かった。

大学生と関わる前は、話す内容や大学生との協働の方法など、大学生との関わり方に不安をもつ方も多くいたが、大学生と関わっている最中や終了後に、大学生に対しての気づきだけでなく自らの組織や個人としての受け入れる上での課題感や改善点などに気づき、次回以降の関わり方を検討している様子が見受けられた。そうしたことから、受け入れを希望される企業や団体も増加傾向にある。

(4)大学生が相談できる場所や人をつなげる。

①判断基準（指標）

○ 定量１：大学生が連絡できる場所や人の数
○ 定量２：雲南市に大学生が訪ねてきた数
○ 定量３：大学生が訪ねた雲南市の場所や人
○ 定性１：大学生を応援する地域住民の声

②評価方法

○ 窓口に相談に来たり、インターンシップ（実践プログラム）に参加した大学生を対象にアンケート

③結果

アンケート回答数25名（回収率：89.2%）

- 定量１：大学生が連絡できる場所や人の数：1人あたり1～3箇所
- 定量２：雲南市に大学生が訪ねてきた数：15名
- 定量３：大学生が訪ねた雲南市の場所や人：54箇所
- 定性１：大学生を応援する地域住民の声
  - ○ 雲南市に縁のない学生たちが地域（雲南市）のためにと活動している姿を見て、勇気をもらう。
  - ○ 若者の姿が見えるだけで、活気があって良い。
  - ○ 雲南市で活動しようと来た学生の宿泊場所がないことはなんとかしなければいけない。

④考察

以上の情報より、相談窓口やインターンシップ（実践プログラム）に参加した大学生は、相談できる場所や人が増加した傾向あり。また、相談できる場所や人として上がった人数は54名程度となった。その中には、個人名はもちろんのこと組織名も挙げられた。

また、すでに活動終了後に雲南市を訪れたのは15名となり、6割の学生が再び雲南市を訪れている。訪問先としては、9名の学生が活動で関わった人や団体を尋ねており、9名の学生が雲南市ならではの観光地やイベントごとへの参加をしていることがわかった。特に、単なる観光地やイベントとしての再訪ではなく、その観光地やイベントに関わる人の名前や背景についても添えられている回答が見受けられた。

地域住民においては、大学生を応援する地域住民の声だけではなく、地域の案内や手作りの食事の提供に加え大学生の困り事などについても真摯に向き合い情報提供をするなど、行動で応援する地域住民が多いということがわかった。

こうしたことから、大学生が自ら雲南市を尋ね、場所や人を訪問しており、その中には事業主体（umi）が把握していないような情報も多く見受けられた。また一度訪問すると、複数箇所を訪れる傾向にあることもわかった。今後の課題としては、事業主体（umi）が把握していない事例をどのように把握するか方法を検討する必要がある。

(5)実践型インターンシップを実施する受注（販売）先候補を開拓する。

①判断基準（指標）

- 定量１：営業数
- 定量２：受注数

②評価方法

- インターンの実施に向けて行った営業活動について整理する。

③結果

- 営業資料を作成した。
- 市内の企業を中心とする営業先リストを作成した。
  - ○ 市外の企業も含めインターンシップ受け入れ先候補としたのは、雲南市での働き方、暮らし方について下記のような種類があると考えられたため、それぞれの比較検証をすることで、学生のキャリア不安の解消やより質の高いプログラム設計に寄与できると考えたためである。
    - ■ 雲南市に居住しながら日中は近隣の地域に働きに出る。
    - ■ 近隣地域に居住しながら日中は雲南市に働きに来る。
    - ■ 居住地域も勤務先も雲南市外だが、休日や余暇を利用して雲南市の地域活動に参加するといった関係人口としての関わりをもつ。
- 営業数：13件
- 受注数：5件（市内3件, 市外2件）
  - ○ 受注に至らなかったケースは下記のような例が見られた。
    - ■ インターンシップを受け入れる際の費用が捻出できない。
    - ■ 受け入れ体制に不安がある。（宿泊施設がない、代表の代替わりなど）
    - ■ インターン生に提供する活動内容に不安がある。

④考察

以上の情報より、実践型インターンシップを実施する受注（販売）先候補を開拓することができていると考えられる。

一方で、受け入れ意欲はあるものの、コスト面や受け入れ体制等の観点から難色を示されることが多く、導入事例を増やしながら受け入れ先の現状にあったインターン設計のパターン化と、行政等の補助金とのセットでの営業を行うことが今後求められる。特に、パターンの例として、インターン導入後に受け入れ体制等の課題により受け入れ先とインターン生の間ですれ違いが起きた際に、受け入れ先との連日の対面とオンラインでの伴走や、学生が抱える課題に対して、課題解決の目標設定とその目標を達成するために、１か月程度の期間において3回ほどの段階的な面談の機会を設けるなど状況に応じた伴走体制を構築した。

3.3　外部との連携の実績

目的	連携先	連携内容
広範囲への情報発信	チャレンジ・コミュニティ	インターン情報の掲載
	ジョブカフェしまね	インターン情報の掲載
	島根大学	授業等での活動紹介
	LINK.しまね岡山拠点	岡山エリアへの周知連携
	LINK.しまね広島拠点	広島エリアへの周知連携
	島根県大阪事務所	関西エリアへの周知連携
	島根県広島事務所	広島エリアへの周知連携
	島根県東京事務所	関東エリアへの周知連携
	一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム	関東・関西エリアでの大学生への周知やイベント等の連携
人材研修	ETIC.	ETIC.提供の研修プログラムへの参加

本事業における外部との連携実績は下記の通りである。

4.　アウトカムの分析

4.1　アウトカムの達成度

4.1.1　短期アウトカムの実績

本事業における短期アウトカムの実績については下表の通りである。

表4-1　短期アウトカムの実績

事業完了時に活動によって目指す状態	指標	目標値	目標達成時期	実績値
大学生が、地域社会で実践する機会を通して地域住民や課題と触れることで自分自身の役割を見出し、社会的・職業的自立を可能とする原体験ができる。	●定量①：地域社会で活躍する自分自身のイメージを言語化できた大学生の数 ●定量②：地域社会で活動するハードルが下がったかどうか	●定量①：50人 ●定量②：40人	2024.02	定量①：39名（窓口：23名、インターン：16名） ●いろんなことに挑戦し続けることで自分の危険な状態に気づくことができていなかった。これからは週に1度は休息の時間をとり自分自身と向き合うことも大切にしたい。 ●取り組む中で起こる課題を解決したくてもできない状態だったが、課題の中にも自分自身が解決できることとできないことがあるということに気付けた。 ●これまで地元への愛着にこだわり続けていたが、まずは自分のやりたいことがあるかどうかが大切だと気付いた。 ●なんとなく林業に興味があったが、それに対し森林組合がどういう仕事してるのかがわかり、自分のやりたいことの明確化とアプローチ方法の探索へのヒントになった 定量②：25名（窓口：17名、インターン8名） ●提案したことを基本的に肯定してくれるので活動のハードルが下がった ●初めてのことに挑戦してが、意外とやればできるものだとわかり、気軽に挑戦してみようと思えた
大学生が、地域社会で活躍する上で、ロールモデル（理想や目標	●定量：ロールモデルとなる地域住民を見つけることができた大学生の数	●定量：40人 ●定性：地域住民との交流	2024.02	定量：30名 定性 ●色んな人通しが繋がって仕事をしているのがすごくわかったし、みんな情

表4-1　短期アウトカムの実績

事業完了時に活動によって目指す状態	指標	目標値	目標達成時期	実績値
に近い地域で暮らし働く地域住民やその一部）にしたい地域住民がいる。	●定性：地域住民と触れることで広がった視野	を通じて新たな視野が広がっている		熱を持って仕事をしていることを知り、すごく刺激をもらった。 ●仕事前に趣味や副業の時間を過ごしてから出社される職員もいてそういう働き方もあるんだと思った
企業や地域自主組織が、質の高いトライアルの機会として、大学生との関わりを求める。	●定性：住民が大学生を求める声 ●住民が大学生に影響を受けた声 ●定量：トライアルによって学生からポジティブな影響を受けた組織の数	●定性：大学生と関わりの中で地域住民にポジティブな影響がある ●定量：企業7件、地域自主組織3件	2024.02	●若い人が来て職場及び地域に活気が出たということが目に見えて分かった ●自分も周囲も学生と一緒に仕事をすることで、一定の意識変容、行動変容がもたらされた ●70代の会長が大学生の意見をしっかり聞き、また職員が学生の意見を尊重したいという気持ちも汲み取ってもらえたという大きな功績があった。組織内でのコミュニケーションが円滑になったことが大きいと思うし、そのきっかけを与えたのは学生の力 ●普段は見せない職員の顔が見れたなど、学生を通すことで社内の雰囲気がよくなった 定量：企業3件、地域自主組織1件

(1)大学生が、地域社会で実践する機会を通して地域住民や課題と触れることで自分自身の役割を見出し、社会的・職業的自立を可能とする原体験ができる。

①判断基準（指標）

- 地域社会で活躍する自分自身のイメージを言語化できた大学生の数
- 地域社会で活動するハードルが下がったかどうか

②評価方法

- インターンの最終振り返り等で学生、受け入れ組織にヒアリングを行い、得られた情報を整理する。

③結果

- 地域社会で活躍する自分自身のイメージを言語化できた大学生の数　39名
  - ○ 自分の強み・弱みといった特性に気づくことでイメージ化に繋がった例
    - ■ いろんなことに挑戦し続けることで自分の危険な状態に気づくことができていなかった。これからは週に1度は休息の時間をとり自分自身と向き合うことも大切にしたい。
    - ■ 取り組む中で起こる課題を解決したくてもできない状態だったが、課題の中にも自分自身が解決できることとできないことがあるということに気付けた。
    - ■ 自分の得意技は、地域の中にある色々な課題や魅力・人の持っている力を掛け合わせてそれらを編集してネクストアクションをしていきたい。
  - ○ キャリアビジョンが明確化されることで自分の活躍したい方向性が定まった例
    - ■ これまで地元への愛着にこだわり続けていたが、まずは自分のやりたいことがあるかどうかが大切だと気付いた。
    - ■ なんとなく林業に興味があったが、それに対し森林組合がどういう仕事してるのかがわかり、自分のやりたいことの明確化とアプローチ方法の探索へのヒントになった。
  - ○ 物理的環境としての地方の解像度が上がることで、自分のキャリアビジョンとの重なりがイメージしやすくなった例
    - ■ ２拠点生活をするには雲南は遠すぎる。もう少し２拠点を行き来しやすいエリアで活動をしていきたいと考えている。
- 地域社会で活動するハードルが下がったかどうか　25名
  - ○ 提案したことを基本的に肯定してくれるので活動のハードルが下がった。
  - ○ 初めてのことに挑戦してみたが、意外とやればできるものだとわかり、気軽に挑戦してみようと思えた。

④考察

以上の情報より、大学生が、地域社会で実践する機会を通して地域住民や課題と触れることで自分自身の役割を見出し、社会的・職業的自立を可能とする原体験ができたと考えられる。

地域で活躍する自分自身のイメージを言語化については①自身の得意・不得意の把握②実際の業務経験を通じたキャリアビジョンの明確化③勤務・居住地として地方が候補となりうるかという判断を可能にする、という３点が地域において獲得できる経験と分類できた。

目標値として掲げていた、定量①地域社会で活躍する自分自身のイメージを言語化できた大学生の数（50名）、定量②地域社会で活動するハードルが下がったかどうか（40名）については、目標値に及ばなかった。その背景として、事業を進める上での基盤強化やコロナウイルス対策等の理由で、対象となる学生の母数を確保することが困難だったことが挙げられる。さらには、振り返りや面談、立ち話などのアウトカムの測定以外の場面において聞かれるような内容でもあったため満遍なく件数を拾うことが困難であった。

加えて、「地域社会で活躍する自分自身のイメージを言語化できた」状態や「地域社会で活動するハードルが下がった」状態といった指標の内容について、指標設定時は緩やかな同意が取れていたものの、組織内で明確な定義の設定が出来ていなかった為、ヒアリング等実績値取得方法のばらつきが出てしまったことも、目標値未達の一因となった。事業所内での定義及び測定方法の統一については評価計画の段階で丁寧に取り組むべきであった。

(2)大学生が、地域社会で活躍する上で、ロールモデル（理想や目標に近い地域で暮らし働く地域住民やその一部）にしたい地域住民がいる。

①判断基準（指標）

- 定量：ロールモデルとなる地域住民を見つけることができた大学生の数
- 定性：地域住民と触れることで広がった視野

②評価方法

- 窓口に相談に来たり、インターンに参加した大学生を対象にアンケート

③結果

- 定量：ロールモデルとなる地域住民を見つけることができた大学生の数　30名
- 定性：地域住民と触れることで広がった視野
  - ○ ワークキャリアに関する視野
    - ■ 色んな人同士が繋がって仕事をしているのがすごくわかったし、みんな情熱を持って仕事をしていることを知り、すごく刺激をもらった。
    - ■ 誰を相手にするかにもよるが、高齢者が多く、そこにアプローチすることが多かったので、連絡手段にFaxや手紙を使って丁寧にやらなければいけないのかと知った。
    - ■ 「キャパオーバーになりそうです」と早めに言うことは、自分のためでもあるが、仕事や仲間のためでもあるということを知った。
    - ■ インターンシップ受け入れ先で出会ったIT事業者さんから、SNSマーケティングも企業成長の一部であると言うことを学んだ。
  - ○ ライフキャリアに関する視野
    - ■ 仕事前に趣味や副業の時間を過ごしてから出社される職員もいてそういう働き方もあるんだと思った。

④考察

以上の情報より大学生が、地域社会で活躍する上で、ロールモデルにしたい地域住民がいると考えられる。

一方で雲南市は市外・県外から移住や出向で来る人も多く、実際にロールモデルとして名前が上がった地域住民の中にはそのように地域に定住しない属性の人も多く含まれていた。多様なキャリアを持つ人が集結しているというのは雲南市のこれまでの施策によって培われた風土によるものであり、島根県の他の市町村でインターンを実施した場合に同じような成果が得られる訳ではないという点は留意する必要がある。

目標値として掲げていた、ロールモデルとなる地域住民を見つけることができた大学生の数（40人）については、アウトカム（１）同様に、事業を進める上での基盤強化やコロナウイルス対策等の理由で、対象となる学生の母数を確保することが困難だったことが挙げられる。さらには、振り返りや面談、立ち話などのアウトカムの測定以外の場面において聞かれるような内容でもあったため満遍なく件数を拾うことが困難であった。

特に、ロールモデルとして地域住民を意識している大学生もいれば、意識下で地域住民の活動を参考にしているが、本人自身も気づいていない、気づいていても言語化できていない大学生もいることが仮説として挙げられる。

(3)企業や地域自主組織が、質の高いトライアルの機会として、大学生との関わりを求める。

①判断基準（指標）

- 定性
  - ○ 住民が大学生を求める声
  - ○ 住民が大学生に影響を受けた声
- 定量：トライアルによって学生からポジティブな影響を受けた組織の数

②評価方法

- インターン（実践プログラム）の振り返りや、個別のヒアリング

③結果

- 定性
  - ○ 住民が大学生を求める声
    - ■ 地域の困り事に対して若者の視点でアイデアを提案してほしい
    - ■ 大学生がお祭りのお手伝いをしてくれたら、いい思い出を持って帰ってもらえるだろうし、人手としても助かる
    - ■ 学生が大学のないまちにいることで、まちも賑やかになると思う
  - ○ 住民が大学生に影響を受けた声
    - ■ 大学生たちが活き活きと活動している姿をみて可能性を感じた。私も第二の人生を謳歌しようと思えた。
- 定量：トライアルによって学生からポジティブな影響を受けた組織の数
  - ○ インターン受け入れ企業と同数　4件

④考察

以上の情報から、住民が大学生を求め、大学生との関わりにより影響を受けていることが分かった。

大学生を求める声が上がる背景としては、受け入れ先に所属している職員という立場でインターン生と関わったり、地域のイベントで偶然大学生と出会ったことがきっかけで、普段は出会わなかった大学生という存在が関わる選択肢として現れたことが挙げられる。大学生に影響を受けた声についても同様である。このことから、若者（特に大学生）と関わりたいと希望する企業や地域自主組織は、そもそも実践プログラムや偶然の機会を介して大学生との関わりを希望するようになる。

目標値として掲げていた、「住民が大学生を求める声」「住民が大学生に影響を受けた声」については、大学生が、事業主体（umi）の知る範囲以外で活動をしていることも多く、地域住民向けのアンケートを取る際にも対象から漏れてしまう地域住民がいることが予測される。加えて、立ち話などのアウトカムの測定以外の場面において聞かれるような内容でもあったため満遍なく件数を拾うことが困難であった。こちらについても、評価方法の検討の余地がある。トライアルによって学生からポジティブな影響を受けた組織の数については、事業を進める上での基盤強化やコロナウイルス対策等の理由で、対応できる受け入れ企業や団体の母数を確保することが困難だったためである。

4.1.2　アウトカムの達成度についての評価

アウトカムの達成度について挙げられることは以下の通りである。

- インターンシップ生は、受け入れ団体をはじめとした地域住民と関わりながら課題に取り組むことを通して、自分自身の役割を見出すことができた。
- 上記の役割を担う経験を通して、インターンシップ生自身の意識下にあった地域社会で活躍するイメージに気づいたり、地域社会で活動する際にハードルになっていることに気づくことができた。
- 雲南市内に活動拠点を置かず、市外で独自の取り組みをしている学生についても、第三者機関として対面やオンラインでumiの相談窓口を利用する方もいた。
- 相談窓口については、一般的な就職活動以外の“働き方”について深める学生も見受けられた。主には、教育魅力化コーディネーターや起業などが挙げられる。こうした学生からは、「大学のキャリアセンターでは主に一般企業を薦められるため、自身の進路の可能性を広い視野で考えづらい」「一般企業以外での進路を考えた時に、どこに相談して良いかわからない」などといった声が挙げられた。
- 上記の経験を通して、社会的・職業的自立を可能とする機会を自ら得る行動も見受けられた。主には、相談窓口やインターンシップで出会った地域住民へ自ら連絡を取り、地域活動で困難を抱えた時や、進路について相談をしていた。
- 一方、企業や地域自主組織においても、継続して大学生との関わりを求める声があった。インターンシップ等の期間限定ではあるが長期間大学生と活動を共にする機会（質の高いトライアルの機会）を通して、大学生の考え方に理解を深め、団体規模や組織体制などの状況に応じた対応策を発見するなどの気づきが複数挙げられた。それだけでなく、大学生が雲南市内で就業体験だけではなく生活体験にも取り組むことで、地域住民と接点を持つ偶発的な機会を介して、地域住民にとっても気づきや働き暮らす上での捉え直しをしている様子が伺えた。
- 企業や地域自主組織から大学生との関わりについて前向きな意見が多く見受けられた背景として、こうした取り組みに対して事前にご説明・コミュニケーションさせていただいたり、インターンシップ以外の単発の取り組みなどから、どのような大学生と受け入れ先との関わりが適切なのかを試行錯誤してきたことが挙げられる。

4.2　波及効果

波及効果として挙げられることは以下の通りである。

- 学生の意識の変容
  相談窓口やインターンシップ（実践プログラム）を通して、学生自身のスキルやマインド、地域社会に対しての認識など意識の変容が見受けられた。
  - ○　学生自身のスキルの変化
    - ■　働いている方や地域住民と関わることは、年齢も違って何を話すといいかわからなかったが、徐々に話題を見つけて話せるようになった。
  - ○　学生自身のマインドの変化
    - ■　人との関わりが仕事においても重要になるとわかり、やりたいことをする上でも人と丁寧に関わることが大切だと気づいた
    - ■　就活など将来設計に対しての具体化
    - ■　自分自身の危険信号について
  - ○　地域社会に対しての認識の変化

■ 事業を実施する上で、さまざまな業種の団体さんと連携していることがわかった。事業を実施する上で、自社だけの思いだけでなく先方のメリットやデメリットなども把握した上で話すべきだとわかった。

● 市外インターンシップ受け入れ先への展開

○ 雲南市外の事業所からインターン受け入れ希望あり
雲南市内の事業所でのインターンシップ情報を入手し、行政区は違うが受け入れができないかというお声がけを2件いただいた。

○ 雲南市外での就業体験と雲南市内での生活体験
雲南市内に住む若者の中でも、雲南市内に居住地をおきながら、雲南市外の事業所へ通う人もいる。そうした就業・生活モデルも一つのキャリア形成に影響が及ぶ体験になる。

● 行政からの受託事業について

○ 本事業において、事業実施から8年間蓄積された成果を分析し、事業が及ぼす効果や成果指標について整理した結果、大学生の学び・成長の視座だけでなく、地域における有用性も可視化でき、行政担当者への事業価値の理解促進が大いに進んだ。

o 行政担当者に新たに認識してもらえた事業価値としては、人手不足が訴えられる地域において若者との接点を一定期間持つことで前進する刺激となることや、活動終了後も継続して活動に取り組んだり関わり続ける状態も期待できることが挙げられ、人材還流を目的として令和5年度の予算化が実現。令和5年度雲南市役所政策企画部政策推進課においてインターンシップ事業の受託が決まった。

○ 雲南市役所政策企画部政策推進課が実施する雲南コミュニティキャンパス（長期インターン）業務においての目的は、当初の目的とは異なり人材還流に主目的を置くため、委託を受ける以上その目的を遂行し、umiの強みとして学生の悩みとその解消のためのプログラム設計のノウハウを活かした。

● 取り組みの認知度向上

○ 雲南市内においても、インターンや学生と事業に取り組みたい地域団体がumiに連絡を下さるようになった。また、島根県全域でも１ヶ月以上の長期インターンを推進する傾向にあり、その事例としてヒアリングを受けたり、連携の話題が上がるなどした。

● 学生と手を繋ぐために

○ 直接対象者（3.3.2.3(1)）
窓口設置を行うことで繋がれる直接対象者の特性としては、自身の課題を分析し、きっかけがあれば課題解決のために行動に起こせる大学生であり、その中には自身の理想の姿に向けて既になんらかの行動を起こしている大学生もいた。
そのため、相談窓口についてお伝えすると直接対象者から問い合わせがあり、困難なく直接対象者とつながることができた。また、直接対象者自身が相談窓口の対象者となりうるか迷い自身から問い合わせができない場面も見受けられ、事業主体（umi）から相談の場を提案することもあった。
上記で生まれた繋がりを継続するためには、相談終了後にこまめな進捗確認やこちらから事後フォローとして状況確認を行ったり、状況によっては再度相談する場を提案することなどを行った。

○ 直接対象者が安心して地域社会で活躍するために

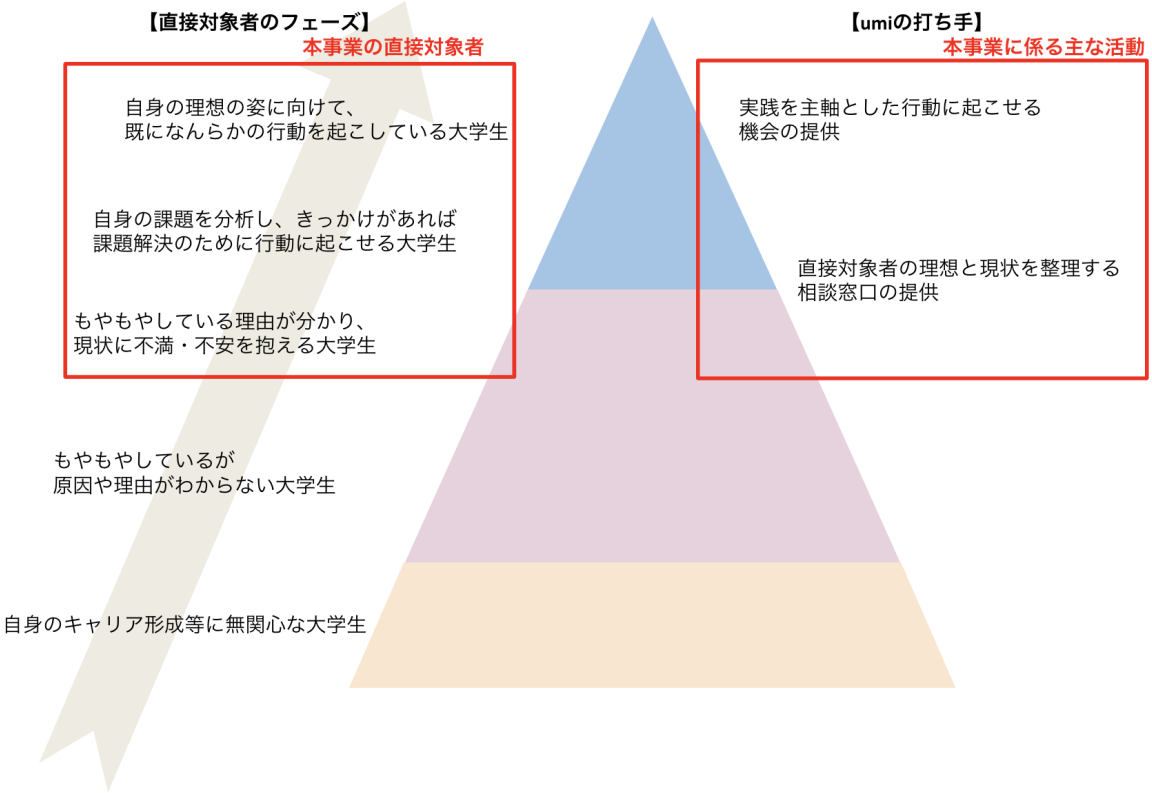
事業主体（umi）はコーディネーターとして常日頃から自己研鑽をし、学生と関わる上で、相談の際にラポールの形成を意識することに加え、テキストでのやりとりについても形式ばりすぎずも丁寧に分かりやすく伝えるように心掛けた。こうした心掛けにより、少し関わる期間が空いた大学生からも、気軽に問い合わせをしていただく事例も生まれた。

○ 直接対象者となりうる大学生と繋がるために

事前評価を行った結果、直接対象者となる大学生には、相談に至るまでの段階があるということがわかった。こうした直接対象者となる前段階の大学生は、相談するに至るほど課題が具体的になっておらず、漠然とした状態では窓口を利用しないということがわかった。そのため、本事業の直接対象者に至るまでのフェーズの大学生と、いかに繋がるか方法を模索した。

主に行ったこととしては、相談できる機会を気軽に立ち寄れるイベント形式で実施した。初回と2回目は、島根大学キャンパス内にある学生市民交流ハウスで行った。その結果、キャンパス内という立地であることから、普段から利用している大学生や友人に連れて来られた大学生など、相談をメインとせず偶発的に立ち寄る事例があり、これをきっかけに雲南市に実際訪れる大学生も生まれた。また、島根県雲南市内での開催については、開催期間がちょうどインターンシップを行っていた期間と重なり、活動終了後に立ち寄る事例が見受けられた。また、窓口イベントを目的に松江市から尋ねてくる大学生もおり、一定のニーズがあることがわかった。加えて、雲南市内での開催は、高校生・社会人の参加も見られた。目的としては、転職等の転機を迎えている若者が、気軽に今後のキャリア選択について話したいといった内容であり、大学生に限らない世代にも、キャリアについて相談できる機会のニーズが一定数あるということが分かった。

大学生と繋がる



- 地域との関係性
  - umiが培ってきた地域との繋がりがあること
    - 本事業以前から事業主体（umi）と深く関わってくださった地域では、大学生の受け入れ体制が徐々に構築される様子が見受けられた。理由としては二つ挙げられる。一つ目は、事業主体（umi）と関わることで大学生と関わる機会や情報をいち早く受け取り、またそうした経験から普段の生活の中では関わる機会の少ない大学生と関わるハードルが下がること。二つ目は、事業主体（umi）と濃い関係性を築けていることから、学生と関わる中で困ったことに対して、迅速に事業主体（umi）に相談できること。
    - 上記のように、大学生の受け入れ体制を構築した地域は、継続して大学生を受け入れる傾向にあることが分かった。
    - これらのことから、地域とコーディネーターを担う事業主体（umi）の関係性が重要だということが分かった。理想は、我々コーディネーターという存在がなくとも、地域と学生が直接やりとりを行い、ミスマッチが起きないように双方の目的をすり合わせ、なんらかの問題が起きたとしてもその都度コミュニケーションをして問題の解消をすることができる。そうしたことから、umiがどのような役割を担っているのかを常に地域と学生双方に伝え続けることが重要であり、そうすることで事業主体（umi）の事業範囲外でも継続して地域と学生がコミュニケーションしながら関わり続けることが可能になる。
    - 地域が大学生との関わりを継続するためには、事業主体（umi）がまず最初に地域に丁寧に入っていく必要がある。地域によっても、歴史・文化やそこに住む方々の習慣や考え方が少しずつ違う。そうした違いを魅力と捉え、学生が関わった際に活用できる地域資源を教育資源に変えていくための工夫を、地域と一緒に模索していく。それにより、大学生が関わるステップが明確になり、大学生と関わる上でのハードルを地域が少しずつ超えていくことを可能とする。

4.3　事業の効率性

直接事業費として予算を組むことで、広報や視察においてより効果的かつ効率性の向上に繋がった。視察においては、他の類似団体を視察する中で事業において大切にするべきことを協議し、そうした経験の中からumiとして目指すべきビジョンを明らかにすることができた。広報においては、視察で明らかになったumiとして目指すべきビジョンを示しつつ、地域団体向けにわかりやすく団体説明をすることができるようになった。

一方、交通費や家賃については、余剰金が発生し、その理由としては主にインターンシップを取り扱う事業が早期に移行してしまったことによる。

加えて、旅費交通費については、当初予定していた視察地について計画通り実行できなかった。かつ、視察において繁忙期が重なり複数人で行く予定だった視察が代表のみの視察対応となった。評価関連経費については、事業の繁忙期も相まって、事業期間を超過して事後評価に取り組んだため依頼をすることができなかった。

法定福利費については、当初見込み計算を行って金額の想定をしていたが、保険料の変化などにより余剰分が生じた

5.　成功要因・課題

5.1　成功要因

関係者間ディスカッションを行い、本事業における成功要因を①地域や行政に関する成功要因、②大学や大学生に関する成功要因、③事業運営・組織体制に関する要因の３つに分類した。

①地域や行政に関する成功要因

- 営業活動を通したニーズ調査・意識変革の促進
  - ○ 本事業を通して行った営業活動で、惜しくもインターンの受け入れに至らない企業もあったが、企業側がインターンを受け入れる際の課題感について把握することができた。
  - ○ また市内の企業は新卒採用を実施していないところも多く、採用や人材育成にコストをかける意義などを説明することができた。

- 多様なプレーヤーと出会える環境・関係性づくり
  - ○ 受け入れ先の企業・組織は都市部と比べて事業規模や社員数が小さいところも多かったが、「働く」だけでなく「暮らす」というところもインターンの中で合わせて設計することで、受け入れ企業以外との接点を持つ機会も多く、単なる職場体験に止まらない学びや出会いを提供することができた。
  - ○ またそのような地域住民との出会いが、地域全体で若者・よそ者を受け入れ育てていくという意識が醸成された。

- ステークホルダーの口コミ
  - ○ 上記の「雲南コミュニティキャンパス」の事務局として、弊社はこれまで大学生と地域組織・住民とのコーディネート業務を進めており、インターンプログラムの受け入れにおいて、過去の実績やステークホルダ同士の口コミが導入に繋がった。

②大学や大学生に対する成功要因

- 大学生のニーズ・キャリア観の把握
  - ○ 窓口での相談などを通して学生の悩みやその背景などを把握することができた。特に事業期間中に対象とした大学生は高校卒業から大学生活の前半にかけてコロナ禍を経験しており、学外での学びや人との出会いというニーズが高い傾向にあった。

- 大学に赴いてのイベント、窓口相談の実施

○ 事務所のある雲南市を中心に活動を行ったが、雲南市には大学がなく、近隣大学からも電車で2時間近くかけて移動する必要があったため、すでに弊社と関係性を持った大学生しか来ないという課題があった。そのため島根大学キャンパス内にある学生市民交流ハウスにて窓口イベントを実施することとした。

③事業運営・組織体制の成功要因

● 自社でのインターンの受け入れ
  ○ 自社にインターン生を受け入れることで、実際に受け入れ企業に提供するサービスのブラッシュアップを図ることができた。

● 組織基盤
  ○ 事前評価で目的のすり合わせができた
  ○ 事業以外での地域住民との接点（副業、地域維持活動など）がある。

5.2 課題

● ニーズの多様化に伴う連携基盤の強化
  ○ 多様化するキャリアプランに対して、市内企業だけでは必ずしもニーズのある業種・職種に対応するのは難しい他、フリーランスのような働き方も長期のインターンシップとは相性が悪い。今後は、トライアルの場として提供できる幅を広げることは継続しつつも、窓口の相談などで市内や自社では対応しきれないケースに出会った際の紹介先などを開拓していく必要がある。

● 収益（持続可能性）
  ○ 行政予算を獲得する形で事業の持続性は担保されたものの、予算変更に左右されたり、受け入れ企業が市内限定といった不安定さは残したままである。また費用に対して売り上げが見合っておらず（もちろん、それを見越した上での基盤強化としての休眠事業ではあるが）、今後も自社が提供するサービスの価値やインパクトを正しく伝えていく他、受け入れ企業や地域にも人材育成にコストをかける必要性については引き続き意識変容を促していく必要がある。
  ○ 行政のバックアップや信頼性込みでサービスが評価されている。

● 学生のケアの仕方
  ○ インターンや窓口相談に来る学生の中にはキャリアという側面からだけでは、解決を図れない家庭環境や心身の健康といった悩みを抱える学生が一定数いる。このような学生に対しては適切な専門機関への受診を打診する必要があるため、関係機関との連携を強化していく必要がある。

● 窓口を必要とする人に情報を届ける力の不足

○ 相談窓口を開催することで、インターンシップなどの実践プログラムを提供する中では出会うことができなかった大学生と出会うことができた。その理由として、これまでに関わったことのある大学生が友人を連れて来てくれたことが大きな要因として挙げられる。そのほか、大学のキャンパス内で実施した回もあり、気軽に参加できることも要因の一つとなった。

○ 新規学生の割合は最大でも1～2割程度に止まる。現時点では窓口機能を利用する学生を安定的に獲得することを重視するが、将来的にはより窓口機能を必要とする人に情報を届けるためには、情報を届けたいターゲットをより具体的に描き、その人の日常生活の導線のなかに適切な相談窓口機能を設置する必要がある。

6.　結論

6.1　事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

事業実施のプロセス及び事業成果の達成度の自己評価は以下の通りである。

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
（1）事業実施プロセス		○			
（2）事業成果の達成度			○		

6.2　事業実施の妥当性

課題やニーズの適切性については、事前評価にあたり大学生と地域双方にアンケートやヒアリングの手法で調査を行い、その結果を事業計画書に反映した。また、調査を通して明らかになった課題やニーズに対応する事業設計を行った。

実施状況については、対応する業務が多いという課題があることから業務工程の見直しが必要である。かつ、複数人数で業務分担する上で、業務分解を適切にする必要があるという課題がある。こうしたことから、事業遂行において想定した水準は達成できているため実施状況は適切であったが、業務の見直しや役割分担という観点で改善する必要がある。

成果の達成状況については、事業実施1ヶ月半を経過した頃に実践プログラム業務を別事業で取り扱うこととなったため、当初想定していた目標値を達成できない状況となった。一方で、相談窓口業務において、設計時間を充分に持つことができたため、当初予定していた実施回数よりも多く実施することができた。そのため、実施場所や内容などの条件によって、理想の相談窓口を創り上げるための仮説を得ることができた。また、地域団体や行政、大学機関との協議する時間を充分に取ることができたため、改めて大学生という存在が地域においてどのような良い影響をもたらすかなど、意見交換や理想状態の共有をすることができた。

7.　提言と教訓

7.1　本事業で取り扱った活動を発展させるための提言

- 地域との関係性づくり
  - ○ 本事業においては雲南市というフィールドでインターンや窓口の相談を通して、ワークキャリアだけでなくライフキャリアへのアプローチも試みている。ワークキャリアに関してはインターン業務を通してヒントが得られ、また我々もコーディネータという役割を持って介入することが可能である。一方で、ライフキャリアのヒントを得るのはインターン外の時間での偶発的な出会いや本人の積極性による部分が大きい。ここの可能性を広げるために実施団体ができるのは①地域のイベント等の情報収集および提供②大学生に対して住民が寛容になるための事前の関係性づくりと言った２点になる。特に住民同士が広く顔見知りの地方部においてはよそ者がうろうろしていると不信感を持たれやすく、事前の説明や挨拶等が重要である。

- 事業対象の具体化・評価項目として妥当な指標
  - ○ 本事業はプログラムの募集に置いて、特に制限を求めていなかったこともあり、事業対象を全国の悩みをもつ大学生としていた。一方で参加可能人数には限りがあるため事業内容は質的に評価をせざるを得ない部分が多く、事業対象は量的に把握した一方で、評価軸は定性による部分が大きいという齟齬が生じていた。
  - ○ そのため社会課題から事業対象を導く際に、社会課題の当事者の中でも事業対象となりうる存在、事業のアウトプットを通してアプローチをする範囲・対象の具体は図る必要がある。
- 事業の自走化
  - ○ アウトプットとして取り組んだインターンシップ等の実践プログラムなどについては、参加する大学生にとっても有益かつ、受け入れ先にとっても有益であるため、行政事業の受託や受け入れ先への営業活動により持続することが可能となる。
  - ○ 一方で、こうした実践プログラムの間にいる悩みを抱える大学生については手を差し伸べる仕組みがない。これまで、大学生から依頼があれば相談を受け、これを自走化することも本事業に取り組んだ目的の一つである。相談を受けることに対して収益化を図ることは、悩みを抱える大学生と繋がるハードルを設けることになると考え、相談を受ける前の繋がる仕組みが収益化の仕組みとなるように今後設計していく。主な計画としては、拠点をつくることで相談窓口をその場所に設け、相談以外の部分（シェアハウスや物販、その他企画）で収益化を検討し、持続可能な事業を目指す。

7.2　事業実施から得られた知見・教訓

- 大学連携の課題と対策

  大学連携を複数の大学と協議を行ったが、大学の担当部署により特徴的な取り組みをされており、その制度に本事業の取り組みを当てはめにいくことが困難であることがわかった。不可能ではないが、当てはめることにより、目指しているアウトカムに適さない方向性になる可能性もある。

  ただし、連携しやすいプログラムを運営されている大学もあり、そうした機会を逃さないためにも連絡をこまめにとり大学側の変化に適応していくことが重要だと考える。

  また、こうした連絡を取り合うことで、大学教員からも学生の紹介をいただき、困難を抱える大学生と手を繋ぐことが可能となる場合もあることがわかった。

- キャリア教育の多様化、国の方針

  文部科学省、厚生労働省、経済産業省によりインターンシップの推進にあたっての基本的な考え方の方針（三省合意）が示された。従来のインターンシップの定義は「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と定義されていた。改正された三省合意では、「学生がその仕事に就く能力が自らに備わっているかどうかを見極めることを目的に、自らの専攻を含む関心分野や将来のキャリアに関連した就業体験を行う活動」と定義が変更となった。

  それにより、学生のキャリア形成支援における産学協働の取組みが以下の4類型に整理された。

  ＜タイプ1＞

  オープン・カンパニー（業界・企業による説明会やイベント）

  ＜タイプ2＞

  キャリア教育（大学などの授業・講義や企業による教育プログラム）

  ＜タイプ3＞

  汎用的能力・専門活用型インターンシップ（職場における実務体験）

  ＜タイプ4＞

  高度専門型インターンシップ（特に高度な専門性を要求される実務の職場体験）

  実践プログラムの一つとして取り組むインターンシップについても、大学との連携を実施する上では、常に情報を更新し適応していく必要がある。また、その状況に応じて、適切な情報発信を行う必要がある。

参考資料

- インターンシップ活動レポート
  - ○ 2022年度自社インターンシップ①：https://umiumu.com/archives/2648
  - ○ 2022年度自社インターンシップ②：https://umiumu.com/archives/2690
  - ○ 光プロジェクト株式会社インターンシップ①：https://umiumu.com/archives/3074
  - ○ 2023年度自社インターンシップ①：https://umiumu.com/archives/3775
  - ○ 2023年度自社インターンシップ②：https://umiumu.com/archives/3761
  - ○ 2023年度自社インターンシップ③：https://umiumu.com/archives/3791
  - ○ 2023年度自社インターンシップ④：https://umiumu.com/archives/3790
  - ○ 大原森林組合インターンシップ
  - ○ 雲南コミュニティ財団インターンシップ：https://umiumu.com/archives/3945

- 新聞・雑誌
  - ○ 住みたい田舎ランキング：https://www.city.unnan.shimane.jp/unnan/kurashi/sumai/teijuu/2024-0109-1539-28.html
  - o 2023年度　特集テーマ「研究と実践をつなぐキャリア教育」ニューズレター第130号　2023年度・秋号（2023.10.31発行）～教育～ https://jssce.jp/wp-content/uploads/2023autumn.pdf

謝辞

本事業を進めるにあたり、東近江・雲南・南砺ローカルコミュニティファンド連合（東近江三方よし基金、うんなんコミュニティ財団、南砺幸せ未来基金によるコンソーシアム）の皆様には、終始熱心なご指導を頂きました。心から感謝いたします。また、本事業以前から終始暖かい応援をいただいている雲南市の皆様がいたからこそ本事業が成り立っております。日頃から応援していただいている地域の皆様にも、お礼申し上げます。